Report & Information

日本常民文化研究所

■新しいホームページが開設されました

本ホームページでは、神奈川大学日本常民文化研究所の活動（講座・企画展・研究会等）の最新情報をお届けいたします。また、本研究所が蓄積してきた成果を活用していただくために、日本常民文化研究所から刊行された全ての刊行物を網羅した総合検索システム（J-PUBS：Jominken Publication Search）を新たに開設しました。ぜひご活用ください。

http://jominken.kanagawa-u.ac.jp/

第9回古文書修復実習講座

本実習では、初心者を対象に古文書修復の最も基本的な、①記録・解体→②修理（裏打ち）→③復原（化粧裁ち・製本）という3工程の技術習得を目的といたします。

■日時：2006年2月26日(日)・27日(月) 10:00〜17:00
- ●2月26日(日)
  基本的な古文書修復技術の説明及び実習
  ①現状の記録・解体　②修理（裏打ち）
  ③復原（化粧裁ち、製本）の工程を実習
- ●2月27日(月)
  10:00〜12:00　上記①〜③の工程を実習
  13:00〜17:00　希望工程の反復練習と反省会

■講師：田上　繁（神奈川大学）・関口　博巨（鶴見大学）
白水　智（中央学院大学）

■会場：神奈川大学日本常民文化研究所 古文書修復室
（神奈川大学 横浜キャンパス3号館102・105室）

■締切：2006年1月27日(金)

詳細については該当する各所にお問い合わせください。
045-481-5661（代）
- ●日本常民文化研究所（内線4358）
- ●歴史民俗資料学研究科（内線4024）
- ●中国語共同研究室（内線4525）
- ●COE支援事務室（内線3532）

歴史民俗資料学研究科

■最終講義のご案内

2005年度で退任される特任教授による最終講義は、下記日時で行われます。

- ●川田　順造　2006年1月11日（水）13:00〜15:00
  「歴史と民俗のあいだで」
- ●三鬼　清一郎　2006年1月13日（金）15:00〜17:00
  「史料との出会い」

■会　場：神奈川大学横浜キャンパス17号館　215室

外国語学研究科　中国言語文化専攻

シンポジウム「中国人留学生と日中戦争」

■日　時：2006年3月4日（土）10:00〜17:00
■会　場：神奈川大学横浜キャンパス17号館　215室
■報告①：「日本人の中国留学に関する史料紹介」
孫　安石（神奈川大学）
②：「中国人留学生と『日華学報』『同仁』雑誌」
大里　浩秋（神奈川大学）
③：「日本占領期華北における留日学生をめぐる動向」
川島　真（北海道大学）
④：「汪精衛政権の留学生政策について」
三好　章（愛知大学）
⑤：「日中戦争期の中国人留学生」
劉　暁琴（南開大学）
⑥：「中国における留学史研究の現状」
周　棉（徐州師範大学）　他
■主　催：科学研究費基盤B
「東アジアにおける『学』の連鎖」グループ

COEホームページ

■ホームページがリニューアルされました

2005年11月から掲載情報がより豊富に、機能的にリニューアルされました。ぜひご活用ください。

●最新活動情報を随時更新
第1回国際シンポジウム詳細がご覧いただけます。

●図像文献書誌情報データベース
日本の各時代・各地域で描かれた図像が、近代に大量印刷された出版物の中に復刻・翻刻などでどのような文献に再録されているかを知るために利用できるデータベースです。任意の単語から検索できる簡易検索画面とカテゴリ別に指定して検索する詳細検索画面を備え、検索結果を印刷できるシステムです。

トップページ

http://www.himoji.jp/

検索ページ

非文字資料研究 No.10

発　行　日　第10号　2005年12月31日 発行
編集・発行　神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
Kanagawa University 21st Century COE Program
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies
〒221-8686　横浜市神奈川区六角橋3-27-1
■Tel.045-481-5661　■Fax.045-491-0659　■URL　http://www.himoji.jp/

神奈川大学21世紀COEプログラム
人類文化研究のための非文字資料の体系化
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

ISSN 1348-8139

News Letter　2005.12　No.10

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

非文字資料研究
The Study of Nonwritten Cultural Materials
News Letter 2005.12 No.10

CONTENTS

巻頭言 …… 3
田上 繁（歴史民俗資料学研究科委員長・COE事業推進担当者）

第1回 COE国際シンポジウム プレシンポジウム 開催レポート

■はじめに …… 4
国際シンポジウム 「非文字資料とはなにか」
■開催レポート
プログラムスケジュール …… 5
セッションⅠ 「記号と写実」 …… 6
セッションⅡ 「身体技法と祭祀芸能」 …… 6
セッションⅢ 「民具と民俗技術」 …… 7
セッションⅣ 「非文字資料の情報化と教育」 …… 8

海外提携研究機関 COE国際シンポジウム参加記
「世界文明論構築の新視野」 …… 王 勇 …… 9
「非物質文化遺産研究との連携」 …… 王 暁葵 …… 9
「人類文化研究の新しい天地」 …… 陳 勤建 …… 10
「『非文字』と『非言語』のあいだ」 …… 村上 史展 …… 11
「歴史の復権と非文字資料」 …… 許 南麟 …… 12
「文化表現に対する理解」 …… 織田 順子 …… 14
●海外提携研究機関代表者懇談会 …… 14

プレシンポジウム 「版画と写真」
■開催レポート
プレシンポジウム …… 15
同時開催 企画展示 …… 16

■コラム 「開拓定住」を問う場としての北海道 …… 17
土田 拓

研究エッセイ ESSAY
「非文字資料」と国際交流日誌 …… 18
ジョン・ボチャラリ

フィールドノート Field Note
韓国全羅南道の旧神社跡地調査報告 …… 20
金 花子

海外博物館事情 Foreign Museums
オーストラリア
多文化展示への模索 …… 22
サイモン・ジョン

2004年度外部評価と対応策 …… 24
21世紀COEプログラム委員会による中間評価 …… 27

■主な研究活動 …… 28
■受贈図書一覧 …… 30
■彙報 …… 31
■Report & Information …… 32

表紙写真説明

「神田明神曙之景」（『名所江戸百景』広重画〈復刻版〉）

神田明神（現、神田神社）は本郷台地の縁にあり東に開けていたので、愛宕山と並んで、江戸の町を見晴らす展望台でもあった。世界は日の出を待っている。「曙之景」という題名にその瞬間が暗示されている。荘厳さを感じさせるのは、その瞬間のためだけではない。これは新年の「若水汲み」ではないかと指摘したのは、神田神社の清水祥彦権禰宜である。そして新年の若水汲みは命の甦りである。

『名所江戸百景』が地震から復興する、あるいは新生する名所を描いた企画であるという自説を加味すると、若水汲みという図像によって地震からの町の甦り、すなわち復興を描いたという絵解きが可能になる。改印の月である安政4年（1857）9月には神田明神の隔年の祭が挙行されている。それをきっかけにこの場所が選ばれた。ただし、神職、巫女、仕丁が待ち望む、朝日の昇る辺りは、中央の木で巧妙に隠されている。地震から約2年、闇に沈む世界は、日の出（つまり江戸の町の完全復活）を待っているのか。

では、この場所は境内のどこであるか。神社が所蔵する、境内を描いた肉筆画や広重自身の錦絵によって、御社殿の前に3本の木と末広稲荷社（絵の右端の赤い建物）があるのが確認できる。したがって、現在の建物の配置からは想像できないが、御社殿の前あたりから南東側を見た光景ということになる。

図像の解明はCOEのテーマであるが、摺りにも注目されたい。ぼかしが各所に美しく散らされ、巫女と仕丁の白衣には布目摺りが使われている。題名を記す色紙型関防も、絵の配色と同じ仕様に仕上げている凝りようである。（原信田 實）

巻頭言

神奈川大学21世紀COEプログラムに寄せて

歴史民俗資料学研究科委員長・COE事業推進担当者
田上 繁

2005年10月、文部科学省による2003年度採択COEプログラムへの中間評価結果が出た。また、歴史民俗資料学研究科など3研究組織を拠点とする本プログラムも一定の評価を受け、今後、2007年度まで残り2年間の事業を継続することが決定した。

本プログラムについては、「文字に表現されない人間諸活動の資料化とその体系化を行うことで、人類文化研究の新たな地平を開き世界的に貢献することを目的としている」とその拠点形成計画が明示された上で、「本プログラムは重要な課題に挑戦しており、個々の活動分野については顕著な進展が見られ、生活絵引の資料化や実験展示等にその成果が結実している」として個別研究の進展に対しては高い評価が与えられた。しかし、その評価は裏を返せば、後半期に成果があらわれる情報発信（4班）を除く、図像（1班）・身体技法（2班）・環境（3班）の各班の調査研究が進んで一定の成果があらわれているとはいえ、本プログラムが目指す3つの非文字資料を統合して「体系化」するといった課題については、その達成度が遅れているとの評価がなされたことを意味する。この3資料を統合し「体系化」することの困難さは、課題設定のあり方に問題があるというより、すでに確立されている事業推進担当者個々の研究手法の違いに起因するといえよう。それは、諸学の連携による学際的な研究を目指す歴史民俗資料学研究科が開設以来抱えてきた課題でもある。

本プログラムでは、そうした課題を克服するため、後半期に入る本年度より図像・身体技法・環境の「体系化」のための理論総括班を設けて検討するとともに、3資料を統合して情報発信する2つの組織（統合情報発信と実験展示）を置き、「体系化」と情報発信の方法を構築していくことになる。具体的には、一つは特定地域で3つを統合し、地域から世界に向けて発信するもので、その地域として福島県只見町を選定し、自治体と協力して研究を進めている。二つめは三者を展示として統合して発信するもので、最終年度には実験展示を行い、その準備過程を含めた報告書を作成して公表する。この二つの課題推進のため、分野横断的に事業参画者を配置替えすることになる。

また、中間評価でも指摘された博士の学位を取得できる人材育成については、歴史民俗資料学研究科の院生などを対象に、非文字資料を収集して資料化し、それを世界へ発信できる高度専門職学芸員の養成とその教育システムの開発に取り組むことで実現する。そして、事業終了後は、文系・理系を超えた全学的な連携により、名実ともに世界の研究拠点として認知される「非文字資料研究センター」（仮称）を設立して、非文字資料の「体系化」の深化と世界に通用する人材育成にあたる必要があろう。

第1回 COE国際シンポジウム プレシンポジウム　開催レポート

神奈川大学21世紀COEプログラムでは、3年目を迎え、調査・研究の整理とともに、プロジェクトテーマを再確認し、総括に向けての方向性を探る場として第1回国際シンポジウム「非文字資料とはなにか―人類文化の記録と記憶―」を2005年11月26日（土）、27日（日）の両日に開催した。なお、これに先立ち、プレシンポジウム「版画と写真―19世紀後半　出来事とイメージの創出―」を11月20日（日）に開催、合わせてシンポジウムの企画展示「浮世絵における常識と非常識―復刻版でみる『名所江戸百景』―」を日本常民文化研究所常民参考室で11月18日(金)～30日(水)まで開催、期間中、ミュージアムトークならびに木版画の摺りの実演も行われた。また、このシンポジウムには、海外提携研究機関の研究者にも参加いただき、期間中の11月27日（日）には懇談会が開かれ、訪問・派遣研究員制度および今後の学術交流に関する検討を行った。

シンポジウムおよびプレシンポジウムの本報告書はそれぞれ刊行されるので、ここでは開催レポートの簡潔な紹介にとどめる。

初日、26日の午前中は、COEプログラムのサブリーダー川田順造氏による基調講演「非文字資料から見る人類文化」が行われた。川田氏は、1）知覚＝運動体としてのヒト　2）知覚と運動の相互作用が生みだす文化　3）人類文化における文字　4）連続のなかの比較と断絶における比較、の4つの問題群を、長年にわたるフィールドワークの具体的資料を提示しながら論じ、アフリカ・フランス・日本における文化の三角測量の有効性を説き、そのポイントを全世界的に広げることで、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」がなされる可能性を説きつつ、4つのセッションに対する問題提起を行った。

川田氏の基調講演を受ける形で、26日の午後には、セッションⅠ「記号と写実―19世紀後半メディアがもたらした衝撃―」（コーディネーター・北原糸子）、セッションⅡ「身体技法と祭祀芸能―祭祀者の動きと人形の動きから―」（コーディネーター・廣田律子）が行われ、27日午前にセッションⅢ「民具と民俗技術」（コーディネーター・河野通明）、午後にセッションⅣ「非文字資料の情報化と教育」（コーディネーター・的場昭弘）、その後に総合討論（コーディネーター・佐野賢治）を行って幕を閉じた。

本プログラムでは、初、2年度はあえて国際シンポジウムを開催せず、中間年に前半の成果を確認するとともに、国内・外の専門家から意見を聞き、後半の研究調査、総括に向けての方向性を探ることを目標にこのシンポジウムを開催したわけであるが、その目的は十分に達成できたと思われる。今回のシンポジウムの反省点も踏まえて、次回以後は、本プログラムの成果を中心に、国際的に発信できる内容のシンポジウムを目指していきたい。（佐野）

非文字資料とはなにか～人類文化の記憶と記録～

プログラムスケジュール

第1日目　11月26日（土）

開会挨拶　山火　正則（神奈川大学学長）
主催者挨拶　福田　アジオ（神奈川大学教授・COE拠点リーダー）

基調講演

「非文字資料から見る人類文化」
川田　順造（神奈川大学教授・COEサブリーダー）

セッションⅠ

「記号と写実―19世紀後半メディアがもたらした衝撃―」
＜コーディネーター＞北原　糸子（神奈川大学非常勤講師・COE事業推進担当者）
＜パネリスト＞
- **原信田　實**（国際浮世絵学会会員・2003年度COE共同研究員）
  「見えない都市―出来事を語る錦絵―」
- **セバスチャン・ドブソン**（イギリス、写真歴史家）
  「写真による日本に対しての眼差しの形成」
- **コンスタンチン・グーバー**（ロシア、ロシア海軍博物館チーフアーチスト）
  「船乗り・画家・発明家 アレキサンドル・モジャイスキーの芸術的・科学的遺産」

＜コメンテーター＞
- **渡辺　俊夫**（イギリス、ロンドン芸術大学トランスナショナル・アート研究所教授）
- **金子　隆一**（東京都写真美術館学芸課専門調査員・COE共同研究員）

セッションⅡ

「身体技法と祭祀芸能―祭祀者の動きと人形の動きから―」
＜コーディネーター＞廣田　律子（神奈川大学教授・COE事業推進担当者）
＜パネリスト＞
- **張　劲松**（中国、湖南省民間文芸家協会副主席・湖南省文学芸術界連合会研究員）
  「中国瑶族の祭祀者の身体技法」
- **田　耕旭**（韓国、高麗大学教授・高麗大学民俗学研究所所長）
  「韓国の祭祀芸能における身体技法
  ―韓国仮面劇に登場する神的存在の身体技法―」
- **大谷津　早苗**（昭和女子大学助教授）
  「人形に見る身体技法―日中の比較から―」

＜コメンテーター＞
- **康　保成**（中国、中山大学教授）
- **山口　建治**（神奈川大学教授・COE事業推進担当者）

第2日目　11月27日（日）

開会の辞　西　和夫（神奈川大学教授・COE事業推進担当者）

セッションⅢ

「民具と民俗技術」
＜コーディネーター＞河野　通明（神奈川大学教授・COE事業推進担当者）
＜パネリスト＞
- **周　星**（愛知大学教授）
  「中国民俗学の物質文化研究は日本の民具学から何を学ぶべきか」
- **尹　紹亭**（中国、雲南大学教授・人類学博物館館長）
  「中国の犂の起源・形態とその分布」
- **高　光敏**（韓国、済州大学博物館学芸研究員）
  「排泄の民俗と民具―済州島・韓半島・舟山島の比較―」

＜コメンテーター＞
- **近藤　雅樹**（国立民族学博物館教授）
- **安室　知**（国立歴史民俗博物館助教授）

セッションⅣ

「非文字資料の情報化と教育」
＜コーディネーター＞的場　昭弘（神奈川大学教授・COE共同研究員）
＜パネリスト＞
- **白　庚勝**（中国、中国民間文芸家協会常務副主席）
  「中国民間文化保護の近影」
- **ジュヌヴィエーヴ・ガロ**（フランス、パリ国立文化遺産研究所校長）
  「フランスにおける文化遺産のプロたち―新しい焦点、新しい挑戦―」
- **能登　正人**（神奈川大学助教授・COE共同研究員）
  「オントロジー理論に基づく非文字資料のデータ化可能性の検討」

＜コメンテーター＞
- **アラン＝マルク・リュ**（フランス、リヨン第3大学教授）
- **橘川　俊忠**（神奈川大学教授・COE事業推進担当者）

総合討論

＜コーディネーター＞佐野　賢治（神奈川大学教授・COE事業推進担当者）
各セッションの報告／討論／まとめ

閉会挨拶　中村　政則（神奈川大学教授・COEサブリーダー）

基調講演により4つのセッションへの問題提起がなされた。

各パネリストは多くの資料を提示しながら各々のテーマを論じた。

第1回 COE国際シンポジウム 開催レポート

セッションⅠ 記号と写実―19世紀後半メディアがもたらした衝撃―

シンポジウム・プレシンポジウムのテーマは、19世紀後半、つまり、日本の開国から江戸時代の終焉、近代国家の出発という政治的、社会的変動期に、写真という未知のメディアがもたらされたことで、既存のメディアはどのような影響を受け、変容していくのか、技術と流通形態の問題を視野に入れ、版画と写真を軸にその変容のプロセスをみようとするものであった。わずか半世紀とはいえ、変動の激しいこの時期を一つに括ることは問題を封じ込めてしまう危険があるので、19世紀後半の前期を「記号と写実―19世紀後半メディアがもたらした衝撃―」、後期を「版画と写真―19世紀後半　出来事とイメージの創出」とに時期的に区分して論じた。

原信田實氏（国際浮世絵学会会員）は、「見えない都市―出来事を語る錦絵」で浮世絵版画『名所江戸百景』が実は安政2年（1855）10月2日に江戸を襲った地震を読み込んだ版画メディアであったという新しい説を披露した。これは、浮世絵版画が専ら芸術、あるいは美術史の観点から解読され、現代とは異なり民衆の安価な楽しみであった当時のあり方から考えれば、当然行き着く考え方であったはずである。しかし、これまで、地震との関係において読み込まれてこなかったということは、それほどに社会の通念とは、時代の支配的価値観に左右されるものだということを示した。

セバスチャン・ドブソン氏（写真歴史家）は、「写真による日本に対しての眼差しの形成」と題し、横浜写真といわれる、開港後の横浜で販売された写真を手広く手掛けたベアトをはじめとする外国人写真家が、カメラのレンズを通して日本人をどのようにみていたのか、また、パリやアメリカでは日本人を撮影した写真家はどのように日本人をみていたのかなど、主として撮影対象とされた日本人イメージの推移を論じ、作られた日本人像が外国に広まる実際の過程を論じた。

コンスタンチン・グーバー氏（ロシア海軍博物館チーフアーチスト）は、「船乗り・画家・発明家　アレキサンドル・モジャイスキーの芸術的・科学的遺産」のテーマで、1854年下田で開始された日露外交交渉のロシア側代表プチャーチンに随伴して来日した海軍士官モジャイスキーの事歴を紹介された。日本では、専らモジャイスキーはプチャーチンが伴った絵描きとして認識されてきたが、ロシアでは画家としてよりも、むしろ、ロシア最初の航空機設計者として著名であることなど興味深い事実を披露した。また、興味深いことには、ロシアでは下田でロシア使節団が日本人を撮影したとする記録は見当たらず、そうした見地からの研究もないとのことなどを明らかにした。

コメンテーターとして美術史家の渡辺俊夫氏（ロンドン芸術大学トランスナショナル・アート研究所教授）は、日本人のイメージが何世紀も前に描かれた日本人像に基づいて描かれると、それが是正されずに踏襲され、外国における日本人像が形成されていくことを実際の絵を提示しつつ論評した。つまり、写真に表出される日本人とは異なる描かれた日本人像が固定観念化していくプロセスを示した。

金子隆一氏（東京都写真美術館学芸課専門調査員）はコメントで、横浜写真で活躍する外国人の写真技術を日本人はどのように学んだのか、技術の伝授、相互の交流の実態をさらに詳しく調査する必要を指摘した。（北原）

セッションⅡ 身体技法と祭祀芸能―祭祀者の動きと人形の動きから―

本セッションでは、芸能に於いて身体表現が伝達しようとする心情・事柄と動作との間に共通性があるかどうかという疑問から出発し、中国の祭祀の場で演じられる祭祀者の動きに、そして韓国のもともと祭祀の場で演じられ芸能化してきた民俗芸能の動きの中から、さらに本来宗教色を帯びていたと考えられる人形の動きから、身体技法の特徴を捉える事で、人類文化の記憶を探ろうと試みた。

中国のヤオ族祭祀者の動きを張劲松氏（湖南省民間文芸家協会副主席）が扱い、「中国瑶族の祭祀者の身体技法」のテーマで話された。祭祀者の舞いは神を迎え、神を喜ばせ、神を送る目的をもち、時計と逆順の回転を組み合わせまた五方を意識している。マジカルなステップからは踏みしめる大地志向がある事が確かめられ、また神霊を招へいし、使役し、悪霊を除く事を目的としたマジカルな指と手を組み合わせた手訣を描く等があるとされた。

田耕旭氏（高麗大学教授・高麗大学民俗学研究所所長）は「韓国の祭祀芸能における身体技法―韓国仮面劇に登場する神的存在の身体技法―」のテーマで話され、韓国の仮面劇はもともと祭祀の場で演じられてきたものが時を経て変化したものであり、仮面劇に登場する人物の動きは招福を象徴する動きとして手を振る動き、セクシャルな動き等がある。また除災を象徴する動きとして、疫神のシシタクタギがソメを取り戻す動き、また五方神将の手を挙げ踏み足をし回転する動き、柳の枝等を用いて悪の象徴を逐いやる動きがあるとされた。

大谷津早苗氏（昭和女子大学助教授）は「人形に見る身体技法―日中の比較から―」のテーマで話された。本来宗教性を色濃くもつ三番叟が人形あやつりの演目にも取り入れられ、その動作から読み取ると、足を踏む事、目が反り返り口を開き表情を変える事や赤い顔が用いられる事は悪霊を払う意味があり、天を仰ぐ動きも宗教的な動きに繋がるとされた。

以上パネリストの発表から、動きの中から読み解く時のキーワードは除災と招福ではないかと思う。災いを祓い清め福を招くための動きが重要である。もちろん中国のヤオ族の動きには道教の影響が伺えるが、本来人類には不孝をもたらすものに対する恐れがあり、それを無くそう祓い清めようとするために様々な動作を案出したのではと考える。一方でこうあれかしと幸福を招こうとする動作も忘れてはならないと考える。これらの動きは人類文化に記憶され、その記憶はアジアを超え広い地域に共通すると考える。（廣田）

セッションⅢ 民具と民俗技術

「民具」とは、日本常民文化研究所の創立者でもある渋沢敬三によって創出された概念である。「道具」とは機能面からみた呼び方だが、各国・各地で長い歴史のなかで使われてきた道具には、その地の風土や民俗・歴史それに民族性が染みついている。この機能以外の付帯情報を重視した場合が「民具」であり、その民具を使いこなしてきた伝統的技術が「民俗技術」である。これらはともに非文字資料として、文字に記録されなかった諸民族の歴史情報の宝庫であり、これらの国際比較を通して、大規模な民族移動をともなって生成されてきた東アジア世界の歴史と民俗に迫ろうとするのが、このセッションの目的であった。

周星氏（愛知大学教授）は、「中国民俗学の物質文化研究は日本の民具学から何を学ぶべきか」と題し、中国の研究は民芸品の芸術的価値を重視する傾向がつよいが、近年の高度成長のなかで庶民の普通に見られた道具や器が急速に工業製品に置き換わる中で、「民俗文物」に関する関心が高まり、「民具」という言葉も使われはじめていることを指摘し、今後、民俗学界も口承文芸や民間文学のみならず民具にも目を向けるべきこと、歴史文献の考証にとどまらずフィールド調査を重視すべきこと、東アジアの比較民具研究を活発にすべきことを提起した。

尹紹亭氏（雲南大学教授・人類学博物館館長）は、「中国の犂の起源・形態とその分布」と題し、E・ヴェルトの西北インド起源犂の中国伝来説を批判して、中国には長江下流域では5000年前の石犂が大量に出土していること、その地の在来犂はインド犂には似ていないことを上げて中国犂は中国起源とした。また雲南省のフィールド調査をふまえて、中国の犂を①大四角枠曲轅犂（長江中下流域）、②無犂柱長轅犂（甘粛～雲南省）、③四角枠長直轅犂（陝西～雲南省）、④三角枠犂長直轅犂（西南・華南・中南）、⑤三角枠曲轅犂（西南・華南・東南アジア）に5分類し、これらの犂型は民族移動と環境に対する適応の結果だと報告した。

高光敏氏（済州大学博物館学芸研究員）は、「排泄の民俗と民具―済州島・韓半島・舟山島の比較―」と題して、生産ばかりを重視してきた研究動向に問題ありとして、環境問題とも関わる排泄を正面から取り上げて韓国・中国の比較を試みた。済州島は韓国でありながら中国的なトイレと豚小屋一体型であり、南海島ではトイレ・豚小屋・堆肥場は別で、下肥は背負い樽で運んで麦畑に施肥した。中国の舟山島では、トイレの糞桶、夜は夜桶にためた糞尿を畑に運んで糞甕で熟成させて施肥している、と報告した。

コメンテーター近藤雅樹氏（国立民族学博物館教授）は、渋沢敬三の民具研究は民芸運動を展開した柳宗悦との対比でより鮮明になる。尹氏の報告は犂以外の民具・民俗技術のセットごとの比較でより豊かになろうと指摘した。安室知氏（国立歴史民俗博物館助教授）は、等閑視されてきた排泄民俗が取り上げられたことを評価し、生業や食文化の研究とともに今後の重要な研究課題であり、東アジアの物質文化研究の発展が期待されると指摘した。（河野）

セッションⅣ　非文字資料の情報化と教育

本セッションは、第1セッションから第3セッションの、図像、身体技法、民具の報告を受け、そうした非文字資料をどう体系化し、どうデータとして取り込むかという課題と、それを情報発信するために、今後どのような教育をするべきかという課題を受け持った。

体系化とは「非文字資料とは何か」という概念設計なく成立しない。その概念設計に当たって、すでに既存の博物館でどのような体系化が行われているか、またそうした資料を保存するためにどのような教育が行われているか、情報としてデータ化するにはどんな方法があるかを知る必要がある。

白庚勝氏（中国民間文芸家協会常務副主席）は、「中国民間文化保護の近影」と題し報告した。中国では、「中国民間文化遺産緊急プロジェクト」と「中国民間文化保護プロジェクト」が始動していて、博物館の建設、出版物の発行などが進められていると現況が紹介された。

ジュヌヴィエーヴ・ガロ氏（パリ国立文化遺産研究所校長）は、「フランスにおける文化遺産のプロたち―新しい焦点、新しい挑戦―」をテーマに、長い歴史のあるフランス博物館の学芸員の教育体制について報告し、パリの国立文化遺産研究所は、学芸員教育が充実しているフランスにあって非常に重要な役割を担っている内容が具体的に紹介された。

能登正人氏（神奈川大学助教授）は、「オントロジー理論に基づく非文字資料のデータ化可能性の検討」と題し報告した。特に非文字資料をデータとしてコンピューターに保存するための可能性について、主にオントロジー的側面からの説明がなされた。

アラン＝マルク・リュ氏（リヨン第3大学教授）と橘川俊忠氏（神奈川大学教授）はコメントとして、非文字資料を文化遺産として保存することの難しさ、そのための人材育成の難しさ、非文字資料自体を分類し、データ化することの難しさに理解を示しながら、今後非文字資料とは何かという理論的な基礎付けが急がれることを指摘した。（的場）

総合討論で各セッションのまとめが行われた。

会場風景

シンポジウム初日終了後には関係者によるレセプションが開催された。

海外提携研究機関

COE国際シンポジウム参加記

世界文明論構築の新視野

王　勇（中国　浙江大学日本文化研究所所長）

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の海外提携研究機関（浙江大学日本文化研究所）の長として、わたしは二回、COE本部にお邪魔したことがある。

一回目は2004年10月6日のことで、福田アジオ先生より事業概要の紹介を伺いながら、脳裏から文字を懸命に追い出して、非文字文化の構図を描こうとした。何かの弾みに、話はわたしが一時的に没頭している鍾馗像に及び、中国の鍾馗と日本の鍾馗の伝授と変容を紹介すると、福田先生は「これぞ非文字文化研究の対象だ」といわんばかりに、日本各地にみられる鍾馗信仰の図像を探し出して見せてくれた。これが非文字資料をはじめて意識的に研究に生かしたきっかけである。

二回目は2005年11月26～27日に開催された第1回COE国際シンポジウムで、テーマは「非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録―」である。個々の報告内容については、COE編纂の報告集にゆだねるが、二日間にわたる発表とディスカッションを聞いているうちに、歴史研究者としてのわたしは、激しい思索に誘われ、方法論の葛藤だけでなく、従来より植えつけられた文明論そのものさえ揺さぶられたのだった。

日本古代史を専攻するわたしにとって、文字資料を重視することはいうまでもないが、文字資料のなかでも、とりわけ「正史」（勅撰歴史書、日本の場合は『六国史』がそれに相当する）を信頼し、一般人の書いた歴史書を「野史」や「雑史」または「稗史」と称して、一段低く見る傾向に慣れている。

思えば、正史というのは五位（中国では五品）以上の役人のことしか記さないのである。それも国家の大事つまり「公事」に限られ、個人的な「私事」は基本的に記述の対象とならないわけだ。

ところが、世の東西を問わず、古代に遡れば遡るほど、識字層は少数派に属し、文字を知らない民族は今でも存在しているはずだ。たとえ文字を知る知識人であっても、かれらの生活のごく一部にしか文字を使わないのである。19世紀、アメリカ人類学者 L. H モルガンの名著『古代社会』によって、文字の使用が文明社会の開幕とされ、「人類の文明史はすなわち文字の歴史だ」という通念が流行り、多くの研究者はその固定概念に囚われてきた。そのため、文字世界と縁の遠い古代庶民の生活および文字に記されていない知識人の営為は歴史家の視線から遠ざかり、民俗学者の視野にとどまるのみとなった。

人類の歴史を振り返ってみれば、文明創造の活動は文字に記されるものよりも、色彩があり、動きがあり、音声があって、多様多彩なものだったのである。つまり、人類の文明史は文字によって記されただけでなく、さまざまな道具、絵画や彫刻、そして建物や景観などにも刻まれているはずだ。また、世界各地にみられる特有な文明創造の遺伝子は、現代人の手まねや身振り、しぐさや作法などの身体技法にも記憶されている。

こうして、しばらく文字の世界から目をそらして黙想すると、眼前に非文字文化の世界が音色にあふれて無限に広がっていくような気がする。これが他ならぬ国際シンポジウム「非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録―」に参加しての率直な感想である。

膨大な非文字資料に関して、従来、民族学者や言語学者それに美術研究者らによってまったく渉猟されなかったわけではないが、画像・道具・景観・伝承・作法・音声・建築などといった個々の事象を体系づけることが、福田アジオ教授を代表とする神奈川大学COEプログラムの目指す目標だと思う。この大業を成し遂げたときは、世界文明史が再構築される時であるに違いない。

わたしどもの研究所は由縁あって、2005年12月をもって、浙江大学から浙江工商大学に移転し、今後は引き続き海外提携研究機関として、この世界文明史再構築の偉業に加わらせていただきたく存じる。

非物質文化遺産研究との連携

王　暁葵（中国　中山大学中国非物質文化遺産研究センター助教授）

この度、神奈川大学21世紀COEプログラム海外提携研究機関関係者として、国際シンポジウム「非文字資料と

はなにか―人類の記憶と記録―」に参加した。僅か2日間の会期だが、密度高い研究発表及び質が高い討論で、刺激に満ちた知的盛宴であった。

人類文化を考えるには、文字資料より「非文字」の部分は遥かに豊富だ、という事実は常に忘れがちである。それは文字の力によるものであり、「研究資料」としては文字化したものが比較的扱いやすいという面もある。しかし、人類文化を「立体的」、「総合的」に把握するには、文字化されたこと以外の人間の活動、しぐさ、音・におい、感触、景観、味覚、写真などを分析する必要がある。その第一歩としては資料を蓄積・整理することである。世界中異なった民族の身体技法、祭祀芸能、民俗技術などを如何に研究資料として「体系化」するかは、極めて重要な課題であり、困難に満ちた挑戦でもある。

この雄大な構想は今度のシンポジウムを通して、その実現の可能性を見ることができた。今回のシンポジウムは、絵、写真などのメディア、身体技法・祭祀芸能、民具と民俗技術、非文字資料の情報化と教育という4つのセッションに分けて研究報告・討論された。いずれも従来の研究分野の蓄積を踏まえ、新しい「非文字資料」という枠組みに位置づけ、分析の手法や扱う対象はそれぞれであるが、千差万別な人類の知識・観念・行為を一つの土台で論議することは「新たな学問分野の創出」、「普遍的な研究方法論の確立」への第一歩となると思う。

川田氏の基調講演で、お互いに影響しあう文化の比較研究は重要であるが、それぞれ独自に起源・発展してきた文化間の比較研究が同時に行わなければならないという「文化の三角測量」説はきわめて刺激的・魅力的な問題提起だと思う。これを応じるような形で、今回の研究報告は日本、中国、韓国、フランス、ロシア、イギリスなどの国の「非文字」資料が分析・比較された。今後はこれを踏まえ、範囲を拡大し、「人類文化を覆う」ことへ向けて着実に進めていくと予想される。

また、非文字資料の情報化と教育についての報告は先端科学技術を取り入れ、オンドロジー理論などの電子情報工学分野の理論・手法を文化研究に応用する試みは、今後の人文科学の研究に一つの方向を示している。これは学際間の緊密な連携でこそできることで、神奈川大学21世紀COEプログラムの研究体制の強さを見ることができた。

我々の「中山大学中国非物質文化遺産研究センター」は2004年4月に中国教育部重点研究基地として認定され、演劇、民間伝承、伝統行事などの「非物質文化遺産」（無形文化財）を中心にプロジェクトを組んで、研究調査を進めていた。（現時点で国のプロジェクトとして進めているのは「中国影絵芝居の調査研究」と「無形文化財分布図の製作に関する基礎研究」である）我々が研究対象としているのは殆ど「非物質的」であり、「非文字」的なものでもある。従って、シンポジウムの報告から参考にすることは極めて多い。当センターと神奈川大学21世紀COEプログラムとの交流は今年始まったばかりだが、今回のシンポジウムを通じて、相互の理解を深めることができ、今後共通の分野においてさらなる緊密な関係を築くことを期待している。ちなみに、神奈川大学21世紀COEプログラムの目標の一つは「国際的な研究ネットワークの形成」である。我々は海外提携研究機関として、これを実現するために全力で協力をしたい。

最後にシンポジウムの主催者及び関係者へ心から感謝の意を捧げたい。

人類文化研究の新しい天地

陳　勤建（中国　華東師範大学中国民俗保護開発研究センター所長）

二年前に、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究拠点リーダー・福田アジオ教授の招きによって、私どもの「華東師範大学中国民俗保護開発研究センター」が、その提携研究機関となった。以来、神奈川大学COE側は、RA研究員、博士後期課程在学の中国人留学生・彭偉文を本研究センターに派遣し、2005年9月17日から9月30日の間に、短期訪問研究員として研究を行った。また、本研究センターの文芸民俗学専門の博士課程在学生の毛巧暉、尹笑非両氏も、前後して神奈川大学に行き、訪問研究員として研修し、その目標を円満に達成した。2005年11月25日～28日に、私は招待に応じて神奈川大学21世紀COEプログラム第1回国際シンポジウムに参加した。交流によって、今回の国際シンポジウムに参加し、私は神奈川大学21世紀COEプログラムのテーマの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」へ新たな認識ができた。これは人類文化研究の新しい天地なのである。

拠点リーダー福田アジオ教授のシンポジウムでの挨拶にあったように、人類の歴史においても、現実のわれわれの日々の生活場面においても、人々の交流と活動の文化は、文字で行われることは少なく、その多くは非文字で行われているのである。これらの非文字的文化は、行動などの形で、我々の日常生活に伴って流れており、人類の発展に大きな役割を果たしてきた。しかし、歴史上、これらを記録することはまれであった。事実はその通りである。歴史学家は、彼らが後代の人に伝えていきたい、一回性の重大な歴史事件だけを記録し、人類の日常的で平凡な、繰り返して行う伝承生活をほとんど無視していた。19世紀半ば以来、民俗学、人類学の発生につれて、人類は自分及び異民族の伝承的生活文化と文化遺留の記録整理及び研究を行ってきて、科学的に人類文化を研究する領域を開拓した。だが、元来の学科の理論視野が限られており、研究者の学識が不足していたがゆえに、我々は人類文化研究に関心を持つと同時に、一本の木に目を惹かれて森が見えないようなこともあった。もっと範囲の広く、量的に豊富な非文字資料を深く理解して把握することを行っていないのである。神奈川大学21世紀COEプログラムの研究は、この欠陥を補い、学術の国際的最先端を占め、世界文化研究の中で新しい天地を開いた。

この21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の、当今の文化研究への貢献は、その従来の学科の境を越えたことにもある。このプログラムは民俗学に基づきながら、学科の制限に束縛されておらず、ほかの学科に自主的に切り込み、新しい学際連合で、人類文化を深く探求する。そして、このプログラムは上層文化と基層文化、大伝統と小伝統の境を破り、人類文化を文化の破片のような形ではなく、完全な形で立体的に示した。今回のCOE国際シンポジウムで、私は幸いに、色々な国からの様々な分野の学者たちが一堂に集まり、それぞれの視点と学術的立場から、人類の多方面の非文字文化資料を研究していることを見ることができた。このような研究を続けていけば、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究は必ず成功を収め、人類への永久の貢献を果たすことができると思う。

神奈川大学21世紀COEプログラムは、当初、私どもの華東師範大学中国民俗保護開発研究センターをその海外提携研究機関とし、ともに博士課程在学生の育成と研究協力の計画をたてた。その内容は、若手研究者の育成、主に相互派遣、調査及び研究の指導などがある。日本における唯一の大学院歴史民俗資料学研究科を有する神奈川大学は、現在の日本の、そして世界の極めてわずかな非文字資料の蒐集・整理及び体系化を行うのに最適な研究拠点である。このような相互提携は、中国の非文字資料の体系化研究をさらに進め、両国の若手研究者の育成及び大学教育の発展を推進することが期待できる。これは、双方にとってもメリットのあることである。われわれはこれからもさらに大きい成果を収めるよう努力していく。

そして、ここで神奈川大学21世紀COEプログラムが、本研究センターの研究及び若手研究者育成に協力してくれることに、感謝を申し上げる。

「非文字」と「非言語」のあいだ

村上　史展（中国　香港大学日本研究学系准教授）

2005年11月26日、27日の二日間、神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘を受けて、第1回COE国際シンポジウム「非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録―」に参加させていただいた。わたしは専門が文学ということもあり、またシンポジウムに招かれた同僚の文化人類学者の代役ということもあって、当初「非文字資料」というものにある種の違和感を覚えていた。わたしはライブラリー・ワークはするが、フィールド・ワークというものを満足にしたことはない。また、非文字資料といって非言語資料といわないのは非文字言語や口頭伝承を含めているからなのだろうが、伝承文学に深い興味を持っているわけでもない。むしろ、自分の文章は棚に上げ

て、作家の練りに練った文章を自己流に読み解くことに快感を覚えるほうである。考えてみればこの違和感は当然で、わたしが所属学科から代役に選ばれたのは専門分野からではなく、今年から交換留学生の担当を始めたからであった。

しかしそうした違和感も発表を聞いていくうちに消えていき、最後の発表者の能登正人先生（シンポジウムでの例に倣って敬称は「先生」で統一する）の、非文字文化は文字通り否定的に「文字文化ではないもの」と定義できるが、肯定的に定義するのは難しいという発言を聞いたとき、一瞬目の前に広大な沃野が開ける思いがした。わたしが見たあの沃野はおそらくわたしの誤解にもとづいたもので、非言語文化の領域と重なるものだったのだろう。非言語文化を言語によって分析すると、それはもう非言語文化としては消え失せてしまう。わたしはきっと音楽や絵画や民具や建築だけではなく広大な非言語文化全域（そういうものがあるとして）を言語による分析を経ずに、別のかたちで知として取り入れ、記憶し記録する方法があるのではないかとふと夢想したのだろう。「非文字」の意義領域は「非言語」を含みながらそれより広いので、「非文字」というのはそのパラドックス解除の可能性への誤解を招き入れながらもそれを回避する命名になっているのかもしれない。

今回のシンポジウムの趣旨には音声・図像・写真・映像・道具・建築物・匂い・味覚など文字で表現されない人間の観念・知識・行為などを総合的に体系化する方法を模索する（筆者要約）と記されている。またそうした非文字資料をプログラム拠点リーダーの福田アジオ先生は主催者挨拶で大きく図像・身体技法・環境景観の三つに分けて説明していたし、この説明は神奈川大学21世紀COEプログラムのホームページでもなされている。このなかで、匂いや味覚や身体技法のデータを収集し記録し分析するのは容易ではなさそうだが、例えば廣田律子先生は民俗芸能の身体技法の調査・分析に取り組んでいるし（『非文字資料研究』no. 9, 2005.9）、川田順造先生が基調講演で示唆し、高光敏先生が民具の面から報告したように、性交・分娩・排泄の身体技法の文化的相違も興味深い。またこうした取り組みとともに、収集したデータを保存し、それに関わる人材の養成もCOEプログラムの中に入っているが、その点に関して今回のシンポジウムでは白庚勝、ジュヌヴィエーヴ・ガロ、そしてすでに紹介した能登正人、各先生の発表があり、さらにアラン＝マルク・リュ先生、橘川俊忠先生のコメントを聞くことができた。

ただ、この種のシンポジウムではどうしても突っ込んだ深い討論が交わされることが少ない。わたしは最後の「総合討論」に欠席して、同時に開かれていた海外提携研究機関との連係に関する会議に出席していたので、「総合討論」で理論面でも実践面でもどれほど深い討論がなされたか知らないが、おそらく同時通訳を介しての1時間45分の討論では、どんなに時間を有効に活用してももっと時間をかけて論議したかったと思った人が多かったのではないだろうか。長い時間をかければいいというものでもないだろうが、その夜の懇親会の席上で「総合討論」コーディネーターの佐野賢治先生が「あんな難しいまとめは今までしたことがない」とおっしゃっていて、そのときの佐野先生の難しそうな顔はよく覚えているが、残念ながらその内容は知らない。しかし、確かに難しかっただろうと想像はできる。

一方わたしが出席した海外提携研究機関との連係に関する会議のほうは、ホームページのリンク、2週間の派遣・招聘期間の使い方、AAS・JSAA・EAJS など海外の学会への参加の可能性などの意見が出て、そして思いも寄らぬこのレポートの提出を課せられた。

最後になったが、シンポジウムを企画運営され、また懇親会でご馳走してくださった方々に記して感謝の意を表したい。諸先生の歓迎のお気持ちは暖かく、あの石狩鍋は懐かしかった。

歴史の復権と非文字資料

許　南麟（カナダ　ブリティッシュコロンビア大学教授）

18世紀日本の人口が3千万人であったとすれば、18世紀の日本には3千万の歴史があるはずだと言えよう。いや、それだけではない。18世紀に生まれ世を去っていた人々のひとりひとりを考えると、その歴史は3千万をはるかに越えるだろう。

しかし、文字資料で扱う歴史は3千万という数字に近づくことははじめから不可能である。大勢の人々の大事な人生と歴史は文字資料の沈黙の闇の中に消えていく。歴史という巨大な言説の荒波の前では日常のささやかな声などは聞こえない。政治史にしろ、経済史にしろ、文字資料の語る歴史には限界がある。

人々の奪われた歴史はどこで復権することができるか。今回神奈川大学21世紀COEプログラム第1回国際シンポジウム「非文字資料とはなにか―人類文化の記憶と記録―」を参観しながら自分自身に投げかけた問いであった。それは、また今回のシンポジウムに寄せた期待でもあった。

「文化」を考える際に度々壁にぶつかるのは、資料の問題である。研究対象が現在のものだとすれば現地調査も可能だが、過去のものだったら、物語を書くつもりではない以上、資料はつねに大きな課題になる。その上、文字資料だけでは十分ではない。それより根本的な問題は、物足りないことをよく承知しながら、文字による「実証」以外にはあまり認めない歴史学者の偏執症である。文字がぼけているとその「実証」もぼけるはずなのに、そういう所は無視されがちである。これはある意味で歴史の横暴であると言えるかもしれない。

開かれた文化研究とはなにか。失われた人々の声と人生の業は復権できるだろうか。その可能性を考えながら、今回のシンポジウムを興味深く見詰めた。見捨てられたところに日を照らし、忘却されたところから文化の深さを見出し、文化研究の幅を広げてくれるのかもしれないという期待感に満ちた二日間であった。

川田順造氏の基調講演で披露された「文化の三角測量」に基づく労働作法の比較では、長い年月をかけて寄せた、身体表象に関する観察と研究なしには発見できない学問の面白さを見た。「記号と写実」のセッションでは、写真・絵図の語る社会史の裏面に何が潜んでいるかを示した一連の報告で、写真であっても、写っている「事実」は写る人とそれをみる人の作為に翻弄される「真実」の世界があることに目覚めた。「身体技法と祭祀芸能」のセッションでは、技法から技法へ、芸能から芸能へと世代を越え伝えてきた文化の豊かさの根強い伝統に気づかされた。そして、「民具と民俗技術」のセッションでは、自然と人間とのあいだに流れている知恵と生存の働きを学んだ。

文字資料がカバーできない、より広くて深い文化の流れを掴もうとする試みはまさに21世紀の学問に重要な貢献をすることは疑問の余地はないだろうと確信した。非文字資料という大洋に向けて踏み出した、胸いっぱいの一歩を感じた時間であった。

でも、たくさんの課題もいただいた。たとえば、川田順造氏の「総合された感覚としての、潔／不潔、浄／不浄の区別、反射的忌避感覚も、文化によって培われた、きわめて根の深いものである」という提言も、その中身を充てるためには、越えなければならない山も高いだろう。

潔／不潔、浄／不浄の問題は、感覚の次元に留まることでは決してない。その背後には思想・思惟もあり、偏見・差別もあり、ときには国家権力、集団暴力も横たえている。その意味で、これは個人の問題でもあり、全体の問題でもある。それゆえ、総合されたとしても、独立変数としての感覚はありえないだろう。長い年月を経て「総合された感覚」の表象としての潔／不潔、浄／不浄は、結局は歴史の産物である。

思惟と感覚・身体技法との相互作用は祭祀芸能にも課題は明瞭に顕している。どのような系統を経て伝えてきても、その技法の中心軸には思惟・認識、理解の存在がある。したがって、あまりたくさんの身体技法を拾い集めても、その中心軸に触れなくては、無意味の世界に落ちいってしまうだろう。

民俗誌の資料の収集には限りがない。これに、人形の技法まで加えると、感覚・技法の世界には、空間的に、時間的に、その量において終りがない。問題は、動作の収集・分類と同時にやらなければいけないのは、それらバラバラの現象を繋げる理論化の必要性であろう。表現、象徴、思惟は分離されない。

空いている穴を一つ一つ埋めていく作業のなかで、非文字資料は確かに光を与えてくれるに違いない。しかし、その資料の量は、想像をはるかに超える。今回のシンポジウムで、強く感じたのは、非文字資料の魔力に一方的に巻き込まれては、という警戒心であった。逆に文字資

料をもうまく利用して、非文字資料の意味化をさらに深めていかなくてはと思った。

しっかりした理論を土台にして、比較研究を進めながら、非文字資料が主導権を握る文化理論を作り上げれば、失われた歴史の復権はある程度できるのではと思いながら会場を去った。

文化表現に対する理解

織田　順子（ブラジル　サンパウロ大学日本文化研究所所長）

この度、2005年11月に神奈川大学21世紀COEプログラム第1回国際シンポジウムに提携研究機関であるサンパウロ大学文学部付属日本文化研究所の代表として参加できたのは実に意義深いものでした。シンポジウムのテーマとなった「非文字資料の記録と体系」は、日本語学を専門とし、文学部日本語日本文学講座で常に文字・漢字のことを話し、学生たちに対する文章読解の練習に明け暮れる私には目新しいものでした。

今回のシンポジウムに参加して改めて思ったのは、文字や文章の読解を教えるにも、その表現の根底にある書き手の意志が、またその表現内容の根底に隠れている文化的要素がわかるようにならなければいけないということです。このような要素の理解や説明には，時として直感的な、経験などによる説明に頼ることがあり、より体系的な理解があればと思うことがあります。やはりより多くの資料が体系化していれば、それらに対する認識も深まり、説明もしやすいということが言えます。

実際、サンパウロ大学文学部日本語日本文学講座を専攻とする学生の多くが、日本語にも興味はあるものの、日本の持つさまざまな文化表現に惹かれて入学するものが多く、文化理解の需要はこれからも高まる一方だと思われます。

こうした面を考えても、皆さまのお仕事はすばらしく、これからも積極的に学び取り、またご一緒に勉強をさせていただくためにも、これからのさらなるご活躍を期待するものです。

最後になりましたが，シンポジウムのときにお世話になった皆々さまに心からの御礼の気持ちを表します。

海外提携研究機関代表者懇談会

国際シンポジウムには私どもの7提携研究機関の代表者を招聘し、参加していただきました。韓国の延世大学の代表が急遽参加できなくなったため、全機関の代表が揃うことはできませんでしたが、6機関の代表が参加しました。シンポジウムの2日目午後に1時間30分にわたり、海外提携研究機関代表者懇談会を開催し、神奈川大学COEと各機関の連携だけでなく、各国の代表が神奈川大学を介して相互に知り合い、親しく懇談する機会にもなりました。懇談の中では神奈川大学21世紀COEプログラムの研究事業についての協力・共同の方法について議論し、また若手研究者の相互訪問についても種々の問題点も含む多くの意見と提案をいただきました。（福田）

■日　時：11月27日（日）15:10〜16:45

■出席者：＜提携研究機関＞王勇（浙江大学）・王暁葵（中山大学）・陳勤建（華東師範大学）・村上史展（香港大学）・許南麟（ブリティッシュコロンビア大学）・織田順子（サンパウロ大学）
＜神奈川大学＞　福田アジオ・中島三千男・橘川俊忠

■主な懇談事項：1. 若手研究員交換事業について
2. 提携研究機関との研究者交流について
3. 提携研究機関との共同事業について

プレシンポジウム　開催レポート

「版画と写真―19世紀後半 出来事とイメージの創出―」

プログラムスケジュール

11月20日（日）

■開会の辞
■主催者挨拶　中島　三千男（神奈川大学副学長）
■基調講演　木下　直之（東京大学教授）
「写真は出来事をどのようにとらえてきたか」
■プログラム
＜パネリスト＞
・原信田　實（国際浮世絵学会会員）
「『名所江戸百景』における構図の新解釈」
・鈴木　廣之（東京文化財研究所日本東洋美術研究室長）
「変貌する明治の図録」
・増野　恵子（早稲田大学非常勤講師）
「見える民族、見えない民族―『輿地誌略』の世界観―」
・金子　隆一（東京都写真美術館学芸課専門調査員）
「内田九一の西国巡幸写真」
■パネルディスカッション
＜コーディネーター＞　北原　糸子（神奈川大学非常勤講師）
■閉会の辞

木下直之氏（東京大学教授）は、「写真は出来事をどのようにとらえてきたか」と題する基調講演で、出来事とそれを伝えることの間にある隔たりについて、浮世絵の事例として、松本喜三郎の生人形興行の宣伝浮世絵に安政江戸地震で鍋をお救い小屋へ寄付し幕府から褒賞された吉原芸者おかねが話題性のある人物として取り上げられつつも、半身裸体で描かれ、芸者に対する世の中の蔑視を表出させていること、また、1874年創刊された新聞錦絵では題材となる新聞記事と描かれた錦絵との間には事件性を増幅させる絵師の強い作為とそれを受け入れる読者の存在があることを指摘した。写真については、江戸時代に自由な撮影対象とはなりえなかった城郭や江戸城内の写真が外国人には規制なく写真として外部に流れていた事実があること、さらには事実を映し出す写真とはいえ、当時の日本では現場を写せないという社会的制約あるいは報道規制があること、さらには写真では撮影不可能な場面をやらせの作為で臨場感を作る事例などがあることの問題も指摘した。つまり、事件や出来事の裏にある事実とは何かを見通す必要性を説いた。また、当時の社会的関心を集めた出来事であった災害写真は、戦争に先立つ形ですでに社会的に普及していたことなどが言及された。

原信田實氏（国際浮世絵学会会員）は、「『名所江戸百景』における構図の新解釈」と題し、安政江戸地震との関わりで読み直すことを主張した。これまで美術史分野で、このシリーズは江戸の名所を描くものとしてのみ解釈されてきたが、原信田氏は近景を浮世絵の枠組みとして設定し、中景を省略、遠景に目を凝らすような構図の意味を、災害から復興する江戸の姿を重ね合わせると読んだ。また、必ずしも客観的な風景を描くものではない以上、そこに戯画としての眼差しとリアルに捉える眼差しが交差するものだとして、金龍山浅草寺や安政江戸地震で倒壊、焼失した松坂屋の復興大売出しに賭けた例などを示し、伝統的浮世絵も出来事を捉えるメディアだとする新説を披露した。

鈴木廣之氏（前東京文化財研究所日本東洋美術研究室長・現東京学芸大学教授）は、「変貌する明治の図録」と題する講演で、人が関わる事件や出来事ではなく、「物」の存在形態を伝える図録類の歴史に着目された。明治に入ると新しい印刷技術によって正確、精緻な大量の複製が可能になったが、その伝統は江戸時代後期の古物収集家の眼差しを受けつぐものであることを指摘された。さらに、写真の登場によって実物大にこだわらない縮尺技法を取り入れることで、さらなる発展を遂げることを跡付けた。出来事ではなく、物を対象にするとはいえ、図録にするという行為の背景には制作の意図が存在し、明治初期の国家的事業においてそれはまさに出来事に匹敵することである点にも言及された。

増野恵子氏（早稲田大学非常勤講師）は、「見える民族、見えない民族―『輿地誌略』の世界観―」と題して、内田正雄による明治初期の小学校教科書として人気の高かった絵入地理書「輿地誌略」4編13冊のうち385点におよぶ図版が、すでに指摘されているように内田がオランダ留学中に得た図版類に基づくものであること、そのうちの約半数がフランスで発行された週刊旅行誌「ルトゥール・イルストレ」によるものであることを指摘した。文字情報では伝わらない視覚的イメージが内包する問題として、この地理書では、西欧圏すなわち文明国では建物の図版が多く、非西欧圏、すなわち未開発国では人種に関する図版が多く、また、日本については図が見られない点を指摘した。これは、日本人自らが見る立場と位置づけているとも考えられるが、この時期に内田自らが日本の位

置を文明国とも非文明国とも位置づけられなかったことを意味するとの解釈を示した。

金子隆一氏（東京都写真美術館学芸課専門調査員）は、「内田九一の西国巡幸写真」と題して、写真の系譜上長崎写真の上野彦馬の弟子であった内田九一が明治5年（1872）の天皇西国巡幸に随伴した際の写真の分析を通して、天皇の眼差しで撮る写真という視覚から、写真の眼差しの問題を指摘された。内田は天皇が観た景色であろう、伊勢、大阪、京都、長崎（海路）、熊本、鹿児島の風景をパノラマ写真として撮影したが、天皇が赴かなかった大阪・神戸では、内田の写真師としての眼差しで自由裁量が効いていることが明確であると指摘された。ここでも、やはり、写真師の視線の問題が論じられた。

以上、二つのシンポジウムで非文字資料としての版画や写真に関して共通して指摘されたのは、何を描くか、あるいはなにを撮るのかという制作者の意図の問題と、これと不可分に結び付く、どのように表現するのかという問題であった。これに関連して論じられるべき問題としては、版画にしろ、写真にしろ、大量複製の製品である以上、これらのこの時期におけるメディアとしての役割、すなわち、どのように流布され、この受け手はどのような人々であったのかということに話題が広がらなかったのは、コーディネーターの至らぬ点であった。

しかしながら、二つのシンポジウムを経て、19世紀後半外国からの圧力によって開国を迫られた日本の特殊な政治的社会的状況下で、版画や写真がメディアとして果たした役割、社会への啓発力、問題の深さと広がり、やがて大衆の時代となる20世紀社会で写真が果たす影響などの問題について具体的な展望などが得られた。（北原）

パネルディスカッションの一光景

同時開催　企画展示

これら二つのシンポジウムの開催中、「浮世絵の常識と非常識―復刻版でみる『名所江戸百景』―」展を開いた。11月18日から11月30日まで、中一日休日を挟み、11日間の開催、国際シンポジウム当日は東京伝統木版画工芸共同組合の協力を得て、木版画摺り師の実演を盛り込んだ。入場者521人という盛況であった。なお、この展示は、原信田實氏による展示構成、展示場設計を金子隆一氏、パネル作成などを2003年、2004年度PDの富沢達三氏の協力を得て、北原が企画を実施担当した。また、渋沢写真と渋沢フィルムの紹介を行う「常民研と非文字資料　映像でつづる昭和初期の日本―渋沢フィルムの世界―」の企画展示も同時開催され、好評を博した。（北原）

展示会場では原信田氏によるミュージアムトークや木版画摺り師の実演が行われ、熱心に説明をきく来館者の姿が多数みられた。

日本常民文化研究所所蔵の渋沢写真の紹介と渋沢フィルムの上映が行われた。

コラム　Column

「開拓定住」を問う場としての北海道

土田　拓（COE研究員・RA）

北海道の平野部にみられる、碁盤状の地割の中に農家が点在する景観は、北海道開拓という営為の歴史性や時代性をよく表している。整然かつ計画性のある地割は、その形成を可能とした技術力・政治力の下に開発が進められたことを示すからである。北海道の場合、このような性格をもった地割は、明治中期以降の拓殖政策の中で主に形成されてきた。そのため地域的にみると、近世から開発の始まった北海道南部よりも、明治以降に開発の進んだ内陸部に多く見出され、それは現在も確認することができる。具体的な有様は航空写真を見ると一番よくわかるのだが、むらの中を歩いている時にもそれを実感することは可能だ。例えば区画の境にそって植えられたであろう防風林（写真1）を目にしたときなどがそうである。このような整然とした区画毎に農家は入植して、土地を拓いてきた。

もっとも、全ての農家が同じ状況にあったわけではない。私がここ二年ほど歩いている北海道紋別市周辺のむらの場合、平野に面した山裾の斜面にも農家がいくつか存在している。写真2の家はそのうちのひとつである。家の地盤を安定させるための石積みを写真中に確認できるが、そこで使われている石は、石積みを目的として集められたものではなかった。

この農家は15町歩の土地の払い下げをうけて入植している。戦後入植であったため、平野部の立地のよいところに新規入植の可能な土地はなく、入植地は石の多い山の斜面となった。そこへ定住し、畑を拓こうとしたとき、根気よく石を除く作業が求められることになる。その石をただ取り除くのではなく、石積みという形で生活空間に利用したのであった。そのような、畑から取り除かれた石を利用した石積みが、この家の周りのいたる所にみられる。母屋と牛舎の間の小道や、水源である湧水に続く小道にまで石積みが設けられている。

山を拓き、除いた石を利用するという営みは、この地域に限ってみられるものではない。北海道以外の地域でもしばしば確認できる。その意味で写真に写る石積みは、人が特定の土地に定住しようとした時に、土地柄を同じくするところのあいだで、ある普遍性を持って共通に立ち現れてくる、開拓定住の基本的要素のひとつといえるだろう。

そうした開拓定住を形作る基本的要素のひとつひとつが、北海道の場合、目につきやすい形で景観に反映されている。そしてその成りたちを、開墾に携わった本人、もしくはそれを見て育った家族より教わることもできる。それらは、他の地域と違い開拓定住がなされてからそれほど時がたっていないことに起因している。

近世以前からの歴史を有する北海道外のむらにおいて、その地の開拓定住のあり方を探ろうとしたときに手がかりとなるのが、景観に残された跡や史資料である。そこから得られる情報はどうしても、史資料の性格に応じて制約されざるを得ない。それに対して北海道のむらでは、開拓定住の跡とそれにかかわった人の体験を相補的に参照することが可能なのである。その利点を上手く生かせることができたならば、開拓定住という人の営為の骨格となる部分がみえてくるように思う。

写真1

防風林（2004.7.31 北海道紋別市・筆者撮影）

写真2

石積み（2004.9.4 北海道紋別市・筆者撮影）

研究エッセイ ESSAY

「非文字資料」と国際交流日誌

ジョン・ボチャラリ（東京大学教授・神奈川大学大学院非常勤講師／COE事業推進担当者）

私の担当している授業の中で、「比較文化基層論演習」がある。東京大学教養学部超域文化科学科の比較日本文化論コースの必修科目であって、八名の若武者が履修している。

授業の一環として、この間築地界隈見学を計画してみた。「何人かの留学生も呼ぼうか」と提案したところ、二つ返事が返ってきたので、留学生が多く参加している別な授業で宣伝してみた。結局、中国から三名の学生、シンガポール、ニュージーランドから中国系の学生一人ずつ、韓国から一人が一緒に行くことになった。

実は、「比較文化基層論演習」では、ちょうどそのときイザベラ・バード（1831年〜1904年）著『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan*）および宮本常一の解説書『「日本奥地紀行」を読む』を取り上げていたところであった。周知のとおり、開国してまだ十年のときに来日したバード女史は日本人通訳者を一人連れて、東北と北海道を旅し、その体験を手記に残している。日本人ならあまりにも当たり前で日常的だからあえて書き留めない現象もこのイギリス人にとっては驚きの連続で、『紀行』に細かく描写しており、今日では貴重な民俗資料として評価されている。さて、今回の見学会は今時の留学生による「築地紀行」になるであろうか。

10:00　歌舞伎座前集合。秋晴れ。

留学生：「歌舞伎を見たことがないが。」
日本人学生：「僕たちも。」
留学生：「面白いかな。」
日本人学生：「さあ。」

留学生は弁当、切符の値段、昼の部と夜の部それぞれ出し物が違うこと、建物の大きさなどに感心する。

日本人学生：「そういわれたら、そうだな。」

10:30　築地本願寺

日本人学生、留学生を問わず、感嘆の声。「こんな建物、見たことがない！」

私：「どういうスタイルかね？」
学生たち：「日本でもあり、中国でもあり、それにインド！」
留学生：「まさしく、仏教の歴史。」
全員：「そうだ！」
日本人学生：「オルガンもあって、キリスト教みたい。翼がついている狛犬なんて、中近東かね。」

本願寺では外国語による布教活動も行われていると聞いたら、なお感心。

11:00　明石町周辺

元の外国人居留地だった界隈へ移動。近世には浅野内匠頭の屋敷や『解体新書』が訳されたところ、近代には慶應義塾大学、立教大学、明治学院大学、近代医学などの発祥の地だ、といえば、日本人学生はそれなりに感動するが、留学生の頭の上にクエスチョン・マークが現れる。日本人学生は一生懸命に説明する。

留学生：「あの大きい建物の上に十字架が見えるけど、教会か？」

今度は日本人学生の上にクエスチョン・マーク。それは先に話していた近代医学の始まりに貢献した聖路加病院であって、宣教師によって創立されたものだから、と私が説明すると、納得してくれた。おまけに、指紋法の発想は築地で生まれた、と聞くと、更に皆は「へー」と感動した。

留学生：「こういう東京は見たことはなかった。」「緑は意外と多いね。」
日本人学生：「そういわれたらそうだね。」

11:30　聖路加ガーデンの展望台

高いところから東京の風景を眺める。下に流れる隅田川、すぐ近くの築地市場、東京タワー、新宿の副都心、遠くの山々。

留学生：「高いビルから見下ろすと、どの町も同じように見えるね。」
日本人学生：「・・・・・」

12:00　佃大橋を渡り、佃島へ

授業の際、佃島のことを少々詳しく説明したためか、日本人学生が熱心に案内役を勤めてくれた。徳川家康が関西から漁師たちを呼び寄せて、この島に住ませた話、佃煮のこと、震災戦災を逃れたので、昔ながらの下町の面影を保っていること、島の守り神の住吉神社のことなど。日本人学生も留学生の質問に答えているうちに調子が乗ってきて、様々なことに気づいたようだ。

日本人学生：「多くの家の前に植木が置いてあるね。さすが下町。」「路地が狭いけど、比較的広い道もある。きっと例の有名な佃島の盆踊りや三年に一回の祭りはここでやっているだろうな。」「島、といっても、埋め立てで島がなくなっている。」「それに、周りにでっかいマンションばかり。東京ならでの風景。」

彼らの熱意は留学生たちに広がっていった。

留学生：「ここはいいね！住んでみたい。」

佃煮の香りを嗅ぎすぎたせいか、一同はすっかりおなかが空いてしまって、「市場ですしを！」との声があがった。

13:00　月島と勝鬨橋を経て、築地市場へ

昼食の前に、波除神社に立ち寄る。玉子塚、海老塚や様々の魚にささげられている塚を見て、全員爆笑。

皆：「日本の民間信仰が面白い！」

祭日のため、市場そのものはもちろんのこと、場外も人がまばら。しかし、わずか数軒の営業中の寿司屋の前に、長い列の人々が待っている。やっと座って、食べ出したら、「おいしい！」という一言以外は会話らしい会話なしで、ただ満足した顔のみ。唯一の不満は「やすくないね」とのこと。

14:30　浜離宮恩賜庭園

庭園の前にたくさんのツアーバスが駐車しているのを見て、悪い予感はするが、その広々した空間に入ったら、観光客の存在はあまり気にならない。日本人学生にとってもはじめての浜離宮なので、留学生同様に周りのオフィスビルと自然にあふれた公園のコントラストに驚く様子。潮の干満で水位を変える池と水門、鴨をおびき入れて、狩場となっていた入り江、東京都で一番古いとされている松の大樹、大道芸の実演などにはかなり興味を寄せているが、最も関心を引くのは池の上に建っている茶屋だ。明治天皇がアメリカのグラント大統領を接待したといわれている茶屋は戦争で焼かれたが、戦後に再建された、という。また長い列で待った甲斐があったみたいで、留学生のはじめての抹茶と和菓子をいただく機会となる。

日本人学生の一人は高校時代に茶道部に入っていたので、お手並みを拝見。留学生も日本人学生も熱心にその先生の真似をする。（気づいたら、店員たちとほかの客が不思議そうな顔で我々をじっと見詰めている。気恥ずかしい思いで退室。）

16:00　新橋駅へ向かう

某社のビルの前で、その斬新なデザインに皆が感心する。

日本人学生：「さすが某社。このビルを建てるのに相当悪いことをしているだろうな。」
留学生：「本当？例えば、どういう悪いこと？」
日本人学生：「今のは冗談だよ。」
留学生：「・・・・・？」

17:00　渋谷の懇親会会場で集合。

今日の出来事、日中韓の乾杯方法や食べ方の違いなどについて楽しく話し合う。

20:00　解散

後日、それぞれのグループに感想を聞いてみた。

日本人学生：「大変面白かった。東京にいながら、ああいう東京を見たことはなかった。留学生と一緒に行ったのもいい意味での緊張感があった。彼らの質問にどう答えるか、彼らにとって何が面白いかを考えるのが非常に勉強になった。留学生の目を通して東京を見ることが大変新鮮な体験だった。」
留学生：「大変面白かった。ガイドブックを見るだけでは行ってみる気にならないようなところだったが、実際に行ってみたら、さりげなく日本についていろいろ勉強になった。今まで、日本の勉強は文献ばかりだったが、本に書かれていないことを日本人と一緒に考えるのが最高だった。」

COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の仕事をやると、どうやら多くの物事――建造物、景観、食べ方など――を「非文字資料」として見直す癖がつくらしい。外国の人々と一緒にこういった資料を見ると、忘れがちな「人類文化」の側面がより鮮明に見えてくる気がした。また、日本人と日本人でない人々が一緒に見て、それについて語り合うと、ただの「見物」ではなく、貴重な国際交流のきっかけになる、と痛感している今日この頃である。

Field Note

韓国全羅南道の旧神社跡地調査報告

金　花子（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

毎年、暑い夏の始まりと共に、8月の韓国日刊紙に間違いなく顔を出す見出しは、日本政府要人の「靖国神社参拝」があったとか、ありそうだとかいうものである。しかも今年は、さらに「太平洋戦争終結60年」の文字が加わった。韓国留学生として最も気の重い時期に、日本の学術研究チームに加わって旧植民地時代の神社調査の聞き取りをすることとなった。言うに言われぬ不安を引きずっての調査旅行というのが、出発前の偽りのない気持ちであった。しかしそれは杞憂に過ぎなかった。旧朝鮮に建てられた多くの神社の内のごく一部の調査ではあったが、今回の成果は日韓関係史を問い直す上からも新しい視点を加えたものとして大いに評価したい。

今回は、リーダーの中島三千男先生が10年ほど前から取り組み、2003年度からは「神奈川大学21世紀COEプログラム」の一環に組み入れられた「旧植民地の神社跡地調査」のスケジュールに従い、2005年8月4日から13日まで、中島先生・津田良樹先生と工学部建築学科学生の川村武史さんに私を加えた4人で韓国南部の全羅南道での聞き取り調査に従事した。分担は、中島先生が聞き取りと写真撮影、津田先生が神社跡地の図面の作成、川村さんはその助手、私は通訳を兼ねて聞き取りに当たった。

旧朝鮮全域の神社の所在については、『朝鮮総督府官報』彙報欄における神社・神祠の創立・廃止・移転・改修などの許可に関する記事をまとめた『神道史大辞典』（薗田稔・橋本政宣編、吉川弘文館、2004年）の付表（佐藤弘毅編）などによって把握することができる。そこには、神社として施設上の要件を満たさない「神祠」という旧朝鮮独自の小さい社殿を含む900余社が示されている。現在判明している海外神社は1600余社であるから、約6割ほどが旧朝鮮にあったことになる。

その中で、全羅南道には、神社・神明神祠・神祠合わせて260社ほどがあったとされる（「神明神祠」とは天照大御神を祭神とする神祠をいう）。これは旧朝鮮各道での最大の数値を示している（2位は黄海道の160社、3位は京幾道の140社ほど）。そこで全羅南道を調査地として選んだのであるが、調査日程の上から260社を全て回ることは不可能である。したがって、光州・木浦などの都市と、田園地帯としての和順郡を調査対象地域に設定した。和順郡には神社・神明神祠・神祠の全てが揃っている（計13社）からである。

8月5日から和順郡の聞き取り調査に取りかかったが、事前に中島先生から和順郡宛に、この調査が日本の過去の植民地支配の実態を正しく理解するためのものである旨を明記した協力の依頼状が出されていた。その甲斐あって、郡役所の文化観光課の沈氏に村々の長老を紹介してもらうことができ、5日間で13社中12社と、ほぼ全てを順調に調査することができた。

5日は梨陽面と清豊面、6日は春陽面、道岩面、7日は道谷面、寒泉面、和順面、8日は東面、南面、同福面、12日は二西面と北面、と和順郡の全ての面を調査した。

韓国では旧神社は社殿のみならず鳥居から狛犬に至るまで全て破壊されており（後述の1社を除く）、既に知る人も少なくなっている。したがって往時を知る人はほぼ70才から80才以上の老人しかいなく、跡地まで案内してもらうのは内心申し訳なく思ったが、多くの老人は親切にまた怨みを露わに出すことなく淡々と対応してくれた（ただ戦争末期の食糧不足の苦しさと日本人警察の取締りの厳しさについてはほぼ全員から聞かされた）。中でも北面のL氏は、戦後足を踏み入れたことがない上、腰を痛めていて遠い跡地まで案内することを嫌ったが、いざ山の道が荒れ果てて言葉だけでは説明しようがないと分かると、杖をつきながら鉈で枝を払いつつ跡地まで連れて行ってくれた。その帰り道も散々山道に迷い、私は恐怖から泣きだす寸前だったが、運よく日が暮れるところでやっと山を出られたときにはほっとした。この献身的な協力には、今、改めて感謝したい気持ちで一杯である。

9日からは都市部の調査へ取りかかった。まず木浦市の木浦文化院を訪問し、光州、羅州の神社も含めた資料を得たが、資料の中には何ヶ所かの神社の写真も載っていた。文化院は文化観光部の所管で、各市に設けられており、歴史専門の職員と郷土の歴史に詳しい老人が詰め、資料も備えてある。ついで10日に順天市、11日に羅州市、12日に光州市を訪れ、神社各1社ずつの聞き取りと図面取りを行った。

村の老人が神社建立や参拝の実態を淡々と口にしたのと違い、都市の公園に集う老人の中には調査目的を疑い「また神社を造り直すつもりか」と怒鳴りつけ、神社調査に対し嫌悪感を激しく示す人もいた。逆に都市のインフォーマントの中には植民地時代のことを嘆きながらも、差別された意識は特にないと発言したり、流暢な日本語で青年時代の思い出を懐かしげに語る人もいた。これは、当時としては少数ながら中・高等教育を受け、学校や就職条件・待遇などでも日本人と「同等」に扱われた経験を持つことによると思われる。

また8月11日には、羅州調査の折に韓国で唯一旧神社の姿を留めている神社として高興郡の小鹿島の神社のことを聞き、急ぎその島へ向かった。この島はそもそも無人島であったが、1916年に朝鮮総統府によりハンセン病患者の強制隔離施設・「小鹿島更生園」が設立され、さらに1936年には、小鹿島神社が創建された。この神社の社殿は、コンクリート造りであったこととその特殊な創立事情のため日本敗戦時の焼失・破壊を免れたものである。今日、ハンセン病の誤まった認識が変わり隔離政策が不要となったことで、病院（療養所）には家族・知人も訪れ、緑豊かな島は観光地として再生されている（帰国後、8月25日に韓国・台湾のハンセン病補償訴訟の判決が東京地裁から出され、日本のマスコミにも大きく取り上げられた）。そして、この神社の社殿（内部には何もない）は、2000年に民族の屈辱の歴史建造物として全羅南道の文化財第71号に指定され、植民地時代の教育資料としても活用されることとなった。

短い調査ではあったがこの調査を通して分かったことは多い。例えば農村地帯である和順郡の神社・神祠の創建は1939年、40年に集中している。これは、青野正明氏「朝鮮総督府の神社政策」（『朝鮮学報』160輯、1996年）によると、1930年代の農村振興運動の展開に加え、1935年以降の総動員体制によって広められたいわゆる「一面一祠」政策の結果であるという。神社跡地の確認に併せて行った聞き取りによっても、神社の建設に当たっては強制労働によって整地、建造がなされ、その後、神社参拝の強制が行われるなど、インフォーマントの年齢により記憶の鮮明さなどに違いはあるが、当時の実態がいくつも明らかになった。また現在その多くは雑木林に覆われているが、和順郡の神社・神祠の建てられた場所は確認できたかぎりでは全て風水にかなっており、村の中心部を見下ろす小高い山や丘の上に建てられている。一方、都市部の旧神社跡地の多くは現在公園となり、階段のみが残っているなど、農村部とは違った様相を見せている。この対比もまた収穫であった。

このように見てくると、恐らく韓国全土の神社跡地もほぼ同様の結果を示すものと思われるが、いずれにしても今後はさらに調査地点を増やし、また可能となった時点で北朝鮮の神社跡地調査にも着手することが必要なのではないかと考えている。

写真1

和順郡寒泉面の寒泉神祠跡地。
雑木林に埋もれ、かろうじて石段跡等が確認できる。

写真2

高興郡の小鹿島にある旧小鹿島神社。
かつてのハンセン病患者の強制隔離施設「小鹿島更正園」内に建てられた。
現在は、屈辱の歴史建造物として全羅南道の文化財に指定されている。

海外 博物館 事情

オーストラリア 多文化展示への模索

Foreign Museums

サイモン・ジョン
（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士前期課程）

オーストラリアの博物館は主に公立である。また、連邦国のため、各州に大きな博物館があり、中央には博物館地区もある。全国に存在する約1,300の博物館（美術館も含む）を考えると、これは1館当たり約1,500人に概当する。しかし、首都・州都に集中しており、博物館が近くにない土地の方が多い。首都キャンベラには「文化地区」が造られており、面白い空間となっているが、人口はたった30万人であり、観光客も少ないため、立派な博物館は十分利用されているとは言えない。

キャンベラは、シドニーとメルボルンの間に、1927年に創立された若い都市である。しかし戦争の出費により、都市造りは遅れてしまった。設計士バーリー・グリフィンの計画に基づき造り続けられたが、彼の名前が付けられた中心的な湖は1963年まで完成されず、それを囲む予定の文化地区はようやく90年代に入ってから形が見えてきた。国立美術館、旧国会議事堂内の国立肖像美術館、国立資料館、国立博物館、戦争記念館、国立恐竜博物館、国立科学技術センター、キャンベラ・ミュージアム＆ギャラリー等が文化地区に含まれる。

2001年（連邦100周年記念）に開館したオーストラリア国立博物館は、建築の面白さにおいても国民の物語が主役である意味においても、新型の博物館である。テーマは土地、国家、国民の3つであり、難事の先住民と白人渡来の両面を扱っている。最先端の技術を使用した展示もモダンな建築も魅力的であるが、残念なことに来館者はまだ少ない。さらに首都は政府、外交、大学、文化という4点だけに集中しているため、人口は今後も増えそうもない。「集合地」を意味する「キャンベラ」にある博物館へ、来館者が増えるようにさらに努力する必要がある。

しかし、オーストラリア戦争記念館には来館者が比較的多い。湖を通し、国会議事堂から直線で見える広い高地に位置し、議事堂と共にかなり目立つ。因みに日本人の知人によると、現地のツアーガイドが「戦勝記念館」と呼んでいたが、その訳は誤りである。戦勝を祝うものとは完全に異なり、戦士の犠牲と戦争の残酷さを忘れないようにするためである。1915年に初めて戦士を記念する発想は、ガリポリで完敗した勇武から生まれた。敗北したベトナム戦争の扱いも大変な問題であったが、犠牲と同時に戦争の愚かさを説明するようになった。表参道、記念堂、博物館、彫刻庭園の4つの区域が丁寧に計画され、静かな場所になっている。そしてちょうど1941年に完成した記念堂では、日豪友好や世界平和のための多様な企画が行われている。

オーストラリア戦争記念館

首都と比べると州都の博物館には来館者数は多い。筆者の地元であるビクトリア州は、「文化の都」を誇り、他州より博物館が多い。ミュージアム・ビクトリアの3つのキャンパスはサイエンスワークスという体験型科学博物館、移民博物館と中核をなすメルボルン博物館である。1854年に州の創立とともにビクトリア州国立博物館が開館した。都心の真中にあったが、2000年に現在のサイトに移動し、かなり広く、モダンな展示空間ができあがった。小学生の頃訪れた当時の博物館も面白かったが、余りに堅すぎ、地味とも言えた。しかし現在の博物館は最先端技術を駆使し、以前は見られなかった多次元の展示が行われている。「民衆のための博物館」というコンセプトから生まれ、面白くさせることを目標とし、多様な企画により幅広い年代の来館者が楽しめる工夫がある。

都心から徒歩10分のカールトン庭園にあるため、メルボルンの象徴である緑の庭園に囲まれ、隣には王立展示館もミュージアムの一部として常設されている。1880年に建設され、同年、メルボルン博覧会の展示会場となり、1901年には最初の国議会がここで行われた。2004年に建築物としてはオーストラリアで初の世界遺産に指定された。この建物が当然博物館の一番大規模な展示物であるが、本館には8つのギャラリーがある。

まず、児童ギャラリーは五感を全て利用し、楽しみながら学べる体験空間である。教育は、やはりこの博物館の最も重要な目的である。通学年齢層向けの展示になると、その展示教育内容は自然科学が中心となりこれに関するギャラリーが4つある。心神ギャラリーは現在工事中であるが、科学・生命ギャラリーでは、国の象徴である有名で珍しい動物、「バーチャル・ルーム」の火星、カンボジアのアンコール等の再現、40平米の世界で4番目で唯一残っている初代コンピューター等が丁寧に展示されている。進化ギャラリーの「恐竜」「大規模有袋動物」「ダーウィンからDNAへ」の展示も人気がある。森林ギャラリーは世界初の博物館内森林と言われ、生きている展示として120種類以上で8千本近くの植物がいきづいている。

他の3つのギャラリーは人間文化を扱っている。教育の他に記録・記念がこの重要な目的である。太平洋ギャラリーではオセアニアという多彩な地域を代表するものとして、南太平洋の島々から移民した人のコミュニティの船などの民具を展示している。ここで目立つところは展示物よりもその間の広い空間であり、これは意図的に太平洋の広さを表している。第一印象としては比較的小さなコミュニティのためには大きすぎると思ったが、その空間にいればいるほど穏やかな気持ちになり、日本の博物館では考えられない程の贅沢な広さに感動した。

現在先住民の扱いは博物館だけではなく、社会全体として一番重要である。先住民ギャラリーは「ブンジラカ」と呼ばれるが、2つの民族の言葉から合体語「創造の場」を意味している。現地の先住民コミュニティが自由に扱える場もあり、展示は全て彼らの許可と相談の上で決められる。オーストラリアギャラリーでは現代の眼差しを展示し、1930年のメルボルン杯競馬で優勝した競走馬の剥製展示がハイライトとなっている。この馬はスポーツ好きなオーストラリア人にとって国民的英雄なのだ。また、人気連続ドラマの舞台が再現され、これと同時に多民族からなる国民の日常生活を表している。

メルボルン博物館　カールトン庭園の中の王立展示館（左）と本館

先住民ギャラリー「ブンジラカ」の体験講座

一般ギャラリー以外にディスカバリーセンターもある。コンセプトは博物館の展示を見ることで学習するだけではなく、子供が博物館のマルチメディアデータベースと実物のコレクションを積極的に使用することである。例えば自分の庭で見つけた虫の殻を持ち込み、実物と比較して自ら見つけることができる。マルチメディアの部分は既にネット検索ができるので日本からでも調べることができる。また館内にはIMAXの世界一大きい3Dスクリーンもある。主に教育向けの映画を放映しているが、IMAX用の一般映画も、来館者を得るためかどうかわからないが、放映していた。

最後にシドニーの博物館にも触れておこう。2005年に中村政則先生と共に筆者は1827年創立の国で最古の「オーストラリアン博物館」を訪問したが、余り印象的なものではなかった。古いままの展示で、民族学より自然科学が重視されているため、魅力は余り感じられない。しかし1988年に開館した、国で最も大きいパワーハウス博物館（応用学芸科学博物館）は大変人気があり、体験型展示も多様な年齢層の来館者から評価されている。

ここ数年、この国の博物館の展示方法は改善されていると思うが、まだまだ改良点がある。「オーストラリアには文化はない」という厳しい評価を聞くが、実際はそうではなく、先住民や諸外国からの移民の混在した多文化社会であり、独特な雰囲気ができていると思う。オーストラリアの博物館が取り組んでいる課題は、様々な文化を尊重しながら、オーストラリア像を表すことである。しかし、集客も同時に重要な課題とであろう。

参考ホームページ
■オーストラリアの博物館・美術館　http://amol.org.au

2004年度
外部評価と対応策

本学COEプログラムは静岡大学情報学部 八重樫純樹教授、国立歴史民俗博物館 常光徹助教授、立正大学文学部 黒田日出男教授を外部評価委員に委嘱し、2005年2月14日に2004年度外部評価を実施しました。当日はチェックシートに基いて、具体的な問題点を指摘して頂き、後日各氏から下記のような評価報告書が届けられました。

委員の評価（要旨）

I 黒田 日出男 委員

2年目の活動は、ゆっくりとしたペースではあるが、おおむね着実かつ順調に研究計画が実行されている。3年目には研究計画の遂行をスピードアップし、全体的な飛躍を期待したい。

1.『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳について

①作業がスローペース過ぎる。
②翻訳出版のターゲットが明確でない。誰のための翻訳か。
例えば次のような目的が考えられる。
A.日本のきわめて独創的な学問伝統を紹介し、絵画資料を活用する研究スタイルを国際的に広げる。
B.日本史や日本文化の研究に興味を持つ学生・研究者にビジュアルでユニークな、そして役立つ入門書として提供する。
C.翻訳というよりも新たな本文を創り出すという展望を持った翻訳作業。

2. データベースと本作りの関係

①先ず本作りをして、それを後からデータベース化するという順序では良いデータベースを作ることにならない。
②分析作業室のパソコン及び関連機器が十分に活用されていない。またPD、RAの研究室にパソコンが見当たらなかったが、各人にノートパソコンを与え、日常的に利用できるようにすべきである。
③第4班の活動が、第1班～第3班の活動と有機的に連携していない。第4班のメンバーが第1～3班の研究活動に加わって、活動や情報発信を発展すべきであろう。そのために、データベース構築をベースにした研究活動の発展に寄与できる編成に組み直すべきである。
④このままでは、国際的な情報発信は書籍という形にとどまる。

3. 日本常民文化研究所の遺産

漁民史料のフルテキスト・データベース化など、もっと積極的に日本常民文化研究所の遺産をデータベース化して情報発信することを考えてほしい。

II 八重樫 純樹 委員

1. 課題名・組織化・活動全般

①課題名の一般への浸透は薄い。
②大学の取り組みは高く評価できるが、現在確保されているスペースでは不安である。

③第4班の整合性に問題がある。第4班が第1～第3班に常に接して活動する必要がある。

2. 研究事業について

①外部研究者の協力体制については、COE終了後も日本の非文字資料研究の拠点として活動することを視野に入れて支援体制を模索する必要がある。
②データベースの構築と情報発信についての2004年度の活動は残念ながら評価に値しない。第4班が第1班～第3班から遊離して活動してきたように見える。本プロラグムの体系的な情報の枠組み設定がされておらず、1～3班の成果との関係が明確でない。また情報の抽出・整理・記述作業には専門家の確保が不可欠であり、そのための人員確保と予算措置をすべきである。
③世界的な情報化・情報発信の動向に注意し、配慮する必要がある。
④1～3班については今後各班の間の連携が必要である。4班については情報化と情報発信について取り組み、その方向を明確にする必要がある。

III 常光 徹 委員

1. 総括評価

①前年度に指摘した問題点は着実に改善されつつある。施設の充実、COE教員・共同研究員の採用による組織強化の努力は高く評価できる。
②データベース構築については、組織体制を早急に強化する必要がある。

2. 各班の活動

①1班の一部課題修正は、今後も常に進捗状況に応じて検討し、早い段階で行うべきであろう。
②2班・3班については新たな領域であり、有効な方法論の模索段階であるとはいえ、次年度の早い段階には見通しをつけるべきであろう。

3. 共同研究について

外部の専門研究者を交えて共同研究を行う方式は高く評価できるが、効果的に機能しているとはいえない。

研究推進会議検討結果

研究推進会議は各氏からの評価報告を受け、現状の問題点を整理・検討の結果、以下のような対応策（2005年度に実行している内容）を決定した。

1. データベース化と情報発信について

各委員から厳しい意見が出された。データベース構築の見通しがないということ、情報発信の全体構想が明確でないこと、またデータベース構築のための人員・予算の確保がなされていないこと等が指摘された。

これらの点については、強く反省しなければならない。3年目を迎えた2005年度には、データベース構築のために専門的なキャリアを持った職員1名を増員し、研究成果をデータベース化する過程を支援することにした。また、情報発信・データベース構築については、4班を中心にしながらも、1～3班の成果を各班でも独自に作成し公開することも考え、2005年度には一部文字データベースについては公開する予定である。

外部評価

2. 第4班の役割と活動について

各委員から、情報発信を担う第4班の活動が不十分であり、データベースの構築についても十分に検討を進めていないことが指摘された。この点については、第4班の自覚を促し、工夫するように指示をしている。4班では、データベース構築のための検討作業を、事業推進担当者・共同研究員の属する研究室の支援を受けて進めている。また広くデータベース、特に歴史情報のデータベースについて様々な試行をしている他研究機関とも提携するように取り組んでいる。

3. 事業間の連携

各委員から、第4班と他の1～3班との間の連携がほとんどなく、そのため十分な成果が見られないと指摘された。この点については、2005年度を通して活動内容を点検し、地域情報発信・実験展示及び理論研究の三つを課題とする新たな活動組織を編成し、発足させることにした。従来の第4班の成員がそれらで中心的な役割を担うことになるが、それに加えて1～3班の成員も加わり、図像・身体技法・環境の三つの統合した研究活動を展開し、4年度・5年度に情報発信を実現する。

4. マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』編さんについて

マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編さんは、日本語版の翻訳であるが、その目標は単に日本研究者にあるものではなく、図像資料から絵引きを作るというユニークな図像活用方法を世界の共有財産にするために行うものであるが、その点についての可能な方法あるいは工夫すべき点の検討をさらに進めるように第1班に指示する。

5. 総　括

以上のように、2年度目になる今回の外部評価では、3人の委員から多くの厳しい指摘があった。それらの問題点はいずれも本プログラムの弱点と内部においてもある程度認識してきた点であり、指摘を真摯に受け止め、改善の努力をしている。

人文系研究者中心の本プログラムでは、データベース構築に関しては必ずしも十分な経験や素養がなく、その点で素人的な段階から始めていたことは間違いないが、工学研究科の本プログラム参画者と人文系研究者の連携もようやく軌道に乗り、2005年度には種々の試みも進められている。

さらに弱点・欠点を克服するために、組織全体の点検を行い、大幅な組織再編成を行うことを計画している。課題別に組織を編成し、予算配分もデータベース化と情報発信に重点を置いた配分をする。また、重点的な課題を地域情報発信、実験展示そして総括理論研究の三つとして設定し、新たな組織で情報発信にむけて活動を行う。

なお、PD、RAへパソコンを支給すべきこと、および分析作業室の活用が不十分であると指摘されたが、初年度からPD・RAには各1台のノートパソコンが貸与され研究および業務において十分活用され、また分析作業室のコンピュータも有効に利用されデータも豊富に蓄積されていると判断している。

21世紀COEプログラム委員会による 中間評価

21世紀COEプログラム委員会審査・評価部会では、平成15年度に採択された拠点のうち131拠点について、中間評価（書面・ヒアリング・合議評価、必要に応じての現地調査等）を実施しました。これは21世紀COEプログラム事業の効果的な実施を図り、その目的が充分達成されるよう、専門家や有識者による補助事業の進捗状況等を確認し、適切な助言を行うとともに、研究拠点形成費等補助金の適正配分に資することを目的として行われるものです。審査・評価部会における当拠点の評価結果は以下のとおりです。

申　請　分　野	学際・複合・新領域
拠点プログラム名	「人類文化研究のための非文字資料の体系化」
中核となる専攻等名	歴史民俗資料学研究科歴史民俗資料学専攻
事業推進担当者	（拠点リーダー）福田アジオ教授　他20名

総括評価

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

コメント

本研究教育拠点形成計画は、日本常民文化研究所の調査研究の蓄積を踏まえて、新たな構想の下に設置された歴史民俗資料学研究科の研究者養成の実績を基礎に、文字に表現されない人間諸活動の資料化とその体系化を行うことで、人類文化研究の新たな地平を開き世界的に貢献することを目的としている。
本プログラムは重要な課題に挑戦しており、個々の活動分野については顕著な進展が見られ、生活絵引の資料化や実験展示等にその成果が結実していて、評価できる。体系化は段階的になされるのは止むを得ないが、今後、各分野における資料の体系化から、プログラムとして当初期待した統合的な「体系化」へさらに進展が見られることが期待される。

人材育成に関しては、その理念をより明確にして、社会的要請に応えられる博士の学位をより多く授与する努力が必要であると考える。

また、コメントに加え、留意事項として、成果刊行物、データベース、展示など、体系化についての最終的な形態を明確にするべきことなどが示されました。

今回の中間評価では、各プログラムに対し4つの評価のいずれかが出されました。本プログラムへの総括評価は、評価ランクの第2順位にあたります。学際・複合・新領域で中間評価の対象になったのは全部で25拠点でしたが、そのうち第1順位ともいうべき「当初の計画は順調に実施に移され、現行の努力を継続することによって目的達成が可能と判断される」という総括評価が出されたのは7件、私たちのプログラムと同じ評価を受けた拠点が17件、そして第3順位ともいうべき「このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、助言等に留意し、当初計画の適切なる変更が必要と判断される」という評価が出された拠点が1件でした。なお、「現在までの進捗状況等に鑑み、今後の努力を待っても当初目的の達成は困難と思われる」という最も厳しい評価が出された拠点はありませんでした。

私どもは、評価で出されたコメント及び留意事項を真摯に受け止め、来年度以降の研究に取り組む覚悟です。

主な研究活動

2005年度 研究推進会議

■第10回 10月26日（06年度以降の組織・事業計画、統合情報発信班発足、本年度外部評価委員および実施日程、年報執筆者エントリー状況について　他）

■第11回 11月30日（06年度研究組織、派遣研究員募集結果、訪問研究員受入れ、国際シンポジウム、プレシンポジウム報告書について　他）

■第12回 12月21日（06年度研究組織・研究計画、COE教員増員、日本学術振興会特別研究員候補者募集について　他）

2005年度 全体会議

■第3回　11月11日（現地調査および06年度以降の組織・事業計画、ワーキンググループ答申。2004年度外部評価への対応、『年報』3号発行等について）

〈全体協議〉

会議後、これまでの研究・06年度以降の組織・事業計画について種々意見交換を行った。

2005年度 研究会 （2005年10月～12月実施分）

班

■10月19日・2班　川田 順造／感性の領域研究のための予備的考察

■12月 6日・統合情報発信班

小野 博（コンテンツ株式会社）／只見地区における高精度デジタル画像データ化の試み

■12月10日・1班公開研究会　「図像から読み解く東アジアの生活文化」

◆主催：神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第1班

- あいさつ：福田 アジオ（神奈川大学教授）
- 司会進行：鈴木 陽一（神奈川大学教授）
- 研究発表：

戴立強（中国・遼寧省博物館研究員）
『清明上河図』と『姑蘇繁華図』

馬漢民（中国・中国俗文学学会常務理事）
蘇州の生活と民俗

張長植（韓国・国立民俗博物館民俗研究科学芸研究官）
朝鮮時代の仏画（甘露幀）にみる伝統娯楽の諸相

金貞我（神奈川大学21世紀COEプログラム共同研究員）
都市図における風俗表現の機能

- 討論

主な研究活動

現地調査 （2005年10月～12月実施分）

小馬 徹	ケニア　ナイロビ、イギリス　ロンドン（10月1日～19日）
ナイロビで急速に成長発展する正書法をもたないシェン語を事例として非文字資料の体系化の研究	
北原 糸子	島根県浜田市（10月6日～8日）
浜田市教育委員会他で、1872年浜田地震についての実地調査	
三鬼 清一郎	京都府京都市（10月7日～11日）
京都府立図書館他で倭城を中心とする文献資料の調査研究	
福田 アジオ、金 貞我、田島 佳也、王 京（RA）、彭 偉文（RA）	中国　蘇州・瀋陽（10月10日～16日）
蘇州及び近郊、遼寧省博物館での東アジア生活絵引き（中国）編さんに伴う現地調査	
河野 通明	富山県滑川市・富山市他（10月13日～16日）
滑川市立博物館、富山市民俗民芸村等での非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査	
山口 建治	新潟県佐渡市（10月15日～17日）
佐渡島開発総合センターでの佐渡の人形芝居調査	
佐野 賢治、橘川 俊忠	福島県南会津郡（10月20日～22日）
只見町教育委員会所蔵資料および只見町景観CD化の現地打合わせ	
河野 通明	石川県羽咋市・富山県新湊市他（10月20日～23日）
羽咋市歴史民俗資料館、新湊市博物館等での非文字資料の体系化のための在来農具の比較調査	
福田 アジオ、青木 俊也、河野 通明、田上 繁、中村 ひろ子、浜田 弘明	福岡県太宰府市他（11月12日～13日）
九州国立博物館等での実験展示に関する最新情報取得のための視察調査	
中村 ひろ子	沖縄県那覇市（11月18日～21日）
沖縄県立芸術大学で行われる日本民具学会大会への参加	
川田 順造	フランス　グラース・カルパントラ・ディジョン（11月30日～12月12日）
第2班の分担研究課題である感性の領域（とくに嗅覚）と身体技法の研究資料収集	
菊池 勇夫	北海道札幌市（12月1日～3日）
近世の北方・アイヌ関係の図像資料読解のための関連文献の閲覧・収集	
北原 糸子	京都府京都市・大阪府大阪市（12月2日～3日）
立命館大学文化遺産シンポジウムへの参加、淀川資料館所蔵の1885年の大阪洪水の写真資料調査	
北原 糸子	新潟県新潟市（12月10日）
新潟大学で文化遺産救出シンポジウムの聴講、災害体験の回復過程についての現代社会のあり方の事例調査	
三鬼 清一郎	福岡県福岡市・佐賀県佐賀市・大阪府大阪市他（12月12日～19日）
倭城・倭館に関する文献資料の調査研究	
金 貞我	東京都文京区（12月14日）
東京大学東洋文化研究所所蔵「清俗記聞」の資料撮影	
北原 糸子	群馬県吾妻郡（12月15日～16日）
上郷岡原遺跡発掘現場において、天明浅間噴火の遺跡調査、災害痕跡とその耕地化の痕跡の確認調査	
田島 佳也	山口県萩市・長門市・下関市（12月16日～18日）
萩博物館、長門市くじら資料館、下関市立長府博物館等において「鸞輿巡幸図」ほか絵図資料の収集調査	
君 康道	青森県三沢市・北海道函館市（12月23日～26日）
絵引作成のための資料調査・収集	

受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2005年6月〜9月）

タイトル	発行所
水嶋　英治編著『博物館学を学ぶ人のための　ミュージアムスタディガイド』	アム・プロモーション（水嶋　英治氏 寄贈）
水嶋　英治編著『Museum　Management　Today』	内田洋行（水嶋　英治氏　寄贈）
岳　永逸著『民俗曲術』1〜3	施合鄭民俗文化基金会（岳　永逸氏　寄贈）
張　衛東主編『八角鼓訊』1〜30	不明（岳　永逸氏　寄贈）
小林　義雄著『世界の影絵芝居と人形等』	氷見市立博物館
ニューズレター　No.6	愛知大学21世紀COEプログラム「国際中国学研究センター」
「疾患関連糖鎖・タンパク質の統合的機能解析」パンフレット	大阪大学大学院医学系研究科21世紀COEプログラム
『先端社会研究』　No.2	関西学院大学大学院社会学研究科21世紀COEプログラム 「人類の幸福に資する社会調査」の研究
活動報告書（2003〜2004）	九州大学21世紀COEプログラム「水素利用機械システムの統合技術」
ニューズレター　No.5	京都大学21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点―漢字文化の全き継承と発展のために―」
ニューズレター　No.8 平成16年度年次報告書　No.2	京都大学大学院法学研究科21世紀COEプログラム 「21世紀型法秩序形成プログラム」
第1期報告書、第2期事業計画書	岐阜大学21世紀COEプログラム「野生動物の生態と病体からみた環境評価」
2003〜2004（平成15〜16）年度中間成果報告書 News　Letter　No.4	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」
『CIRMニューズレター』No.10、11	慶應義塾大学21世紀COEプログラム「心の統合的研究センター」
ニューズレター　No.5	慶應義塾大学21世紀COEプログラム「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成―多文化世界における市民意識の動態―」
平成16年度成果論文集　1　『日本文化と神道』No.1 日本における神観念の形成とその比較文化論的研究　研究調査報告書III『薩歳の祭り』	國學院大學21世紀COEプログラム 「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」
News　Letter　No.2「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」	静岡大学21世紀COEプログラム「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」
『史資料ハブ　地域文化研究』No.5	東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「史資料ハブ地域文化研究拠点」
実績報告書	東京工業大学21世紀COEプログラム 「インスティテューショナル技術経営学」
2004年度事業概要、地球史研究センター年報	東京工業大学21世紀COEプログラム「人の住む惑星ができるまで」
平成16年度成果報告書、2005年度パンフレット	東京工業大学電気系5専攻COE 「フォトニクスナノデバイス集積工学」拠点室
ニューズレター『Wind　and　Effect　News』No.7 英文Bulletin　No.4	東京工芸大学工学研究科　風工学研究センター
ニューズレター　No.5 2003〜2004年度報告書	東京大学大学院21世紀COE「心とことば―進化認知科学的展開」
『DALSニューズレター』No.9、10	東京大学大学院人文社会系研究科21世紀COEプログラム 「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」
UTCP　Bulletin　No.4、5	東京大学大学院総合文化研究科21世紀COEプログラム 「共生のための国際哲学交流センター（UTCP）」
オープンリサーチセンター整備事業報告書『舞台評論』No.2	東北芸術工科大学東北文化研究センター
『ロシア史料にみる18〜19世紀の日露関係』第1集	東北大学東北アジア研究センター
中間報告書	東北大学大学院医学系研究科21世紀COEプログラム 「シグナル伝達病の治療戦略創生拠点」
News　Letter　No.2	21世紀COEプログラム日本福祉大学プロジェクト
ニューズレター　No.5	一橋大学21世紀COEプログラム 「現代経済システムの規範的評価と社会的選択」
国際ワークショップ「神経・精神の疾患の診断と治療」まとめ	藤田保健衛生大学21世紀COEプログラム 「超低侵襲標的化診断治療開発センター」
研究成果報告集『国際日本学』No.2	法政大学国際日本学研究センター
『開国史研究』No.5	横須賀市開国史研究会
News　Letter　No.1	早稲田大学21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」

調査研究協力者

本学プログラムの調査研究活動を支援していただくため、
今年度のCOE調査研究協力者に下記の方が追加委嘱されました。

班	氏　名	所属部局・職名
1	中町　泰子	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程

貴重資料の紹介

❶土佐内　記光信筆　『福富草紙絵巻』（江戸中期頃写、紙本淡彩色画）
❷『地震津波　末代噺乃種』（江戸後期刊、一部彩色刷絵入）
❸『大地震津波の奇談』（江戸末期刊、一部彩色刷絵入）
❹八隅　蘆菴（景山）著　『旅行用心集』（文化7年・1810刊、須原屋伊八等版）
❺磯野　信春（文斎）著画　『長崎土産』（弘化4年・1847刊、大和屋由平寿桜版）
❻鈴木　牧之著『北越雪譜』全7冊　（明治期刊、江島喜兵衛他版）
❼Edward S. Morse　*Japanese Homes and Their Surroundings*（Boston: Ticknor and Company,1886）
❽John Batchelor　*The Ainu and Their Folk-Lore*（London:Religious Tract Society,1901）
❾Ella M.Hart Benett　*An English Girl in Japan*（London:Wells Gardner,1904）

❶

❷

❸

❼

※2005年度に購入した資料

派遣研究員・訪問研究員

派遣研究員

氏　　名：樫村　賢二（COE研究員・PD）
派　遣　先：延世大学中央博物館
期　　間：2005年12月1日〜12月14日
研 究 課 題：オートバイ宅急便からみる韓国社会について

氏　　名：大西　万知子
（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程）
派　遣　先：サンパウロ大学日本文化研究所
期　　間：2005年12月2日〜12月18日
研 究 課 題：アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信（展示）の発達比較

訪問研究員

氏　　名：陳　頴恩
（香港大学日本文化研究学系・現代日本経済史専攻院生）
受入れ期間：2005年12月5日〜12月18日
研 究 課 題：日本の都市計画、経済環境、市民生活

氏　　名：宋　俊華（中山大学中国非物質文化遺産研究センター助教授）
受入れ期間：2006年2月22日〜3月7日
研 究 課 題：日本の無形文化遺産研究のための非文字資料体系化調査

編　集　後　記

今号は、第1回国際シンポジウムの次第、内容を中心に編集した。プレシンポジウム・参考展示も含め運営も広汎に及ぶ中、事務スタッフに助けられ会は何とか成功裡に終了できた。中間点での成果の確認と今後の方向性を再確認するよい機会となったし、国際シンポジウム運営のノウハウも蓄積できた。本シンポジウムの趣旨が海外の学界に波紋を起こす一石になればさらに嬉しい。　（佐野）

今冬は例年にない厳冬ですが、第1回国際シンポジウムはそんな厳しい寒さが始まる直前、色付いた木々が目にまぶしい、穏やかな秋晴れの日に行われました。当日は国内外から参加されたシンポジウム関係者の方々をはじめ、たくさんの方にご来場いただきました。報告集作成などの課題が残っているものの、本シンポジウムが無事終了したことに、スタッフ・関係者一同胸をなでおろしたところです。　（関）